

舊典
類纂

皇位繼承篇

下

特261
417



始



りとき、新院○龜山天皇ヲイフへも奏し、かゝることをあたふたあごめやう、
 東北所方北若宮○無仁親王ニテを坊に立存りぬ、十月
 五日御會行をせしむとめてたり、かゝる世に在りぬ、所んあ
 ぐさ免と、此際いひしむと、その世に在りぬ、道心よと
 あらぬばおぼしとまじりぬ、是ぞあまのききとあいなう
 世人もあひりつべし、所門○後宇多天皇ヨリイフいま二をのり
 此所方北のまあり、儲の若陸年まさむるためし、遠き昔に
 ききおきぬ、道心ハ三條院、小一條院、高倉院あどやおそま
 し、所ん高倉院の所末ぞ今もかく、落んえさせおほしませば
 かしこき候あり、古北天皇天皇と天武天皇とハ同じ陸腹
 此所もくあらあり、その所末まじり、はうちかたり、世を志
 ろしめし、なめしあどぞ思ひや出けん、所二あつむ
 て位もいおと、まさぬんと思ひり、云何とあく、道行不

移弘安ト十年となりぬ、此みよのど○後宇多天皇位ハつぎ後
 ひく十三年なり、あまめり、本院○後醍醐天皇待遠にお
 ぶらるらん、いと石く持等存つるもや、例の東より
 奏する事あり、新院○龜山天皇此所方ざむしハ、心細
 聞し、る、あやむ、云云、あろづあのどおぼさる、後
 せど、その年の十月ありぬ、あさせり、○後宇多天皇位ハ伏
 云、いとあ人移くうつろひぬ、世をまけあ、新院ハおぼ
 さるべし、春宮○伏見天皇位ハ即き、此ひぬ、天下本院
 おあしうつりぬ、此北中あし、あまの心ざり、あ、る
 際もを顯せける云云

同書卷七第三十ありあの事ば今ハ新院○後宇多天皇
 少也れバ、太上天皇三人○後醍醐天皇、皇孫、皇孫あま、ま
 是頃あり、ゆららしく、傳りもや、云云、正應も三年ありぬ

ひの長うげまきとりのを託、名乗廻りてのこゝろに我ひせ
 きけむが、誰ううありあど〜〜ひ〜ゆ〜、かく移る二條
 東極の毎屋備後守とてや、五千餘騎も〜馳来〜時を
 つくるも、合まの聲もどつては、まえけむ心やま〜て内
 委の、所敵どりの格不引うあ〜〜亂世入るも、かあ〜ド
 と思ひ〜おのあ〜どの所志とあの上まで、浪原自害〜
 ぬ、太郎ありりのを託らひ、南殿の所懐中〜自害〜
 ぬ、弟の八郎とひひて十九もありり、大床を託楳の子
 ぶ〜〜、寄る若託足をき〜〜、ま〜〜も、さ〜があひ
 だ〜〜揃ゆんとま〜、かあ〜で自害するも、賜を〜皆
 くり出〜〜ま〜持り〜、ま〜あ〜うら〜も、お波羅
 へかきつ〜け〜あ〜〜り 云 世の中ゆ〜り 獲〜る
 言の葉もあ〜、此事次第も、お波羅も〜〜とま〜

お、三條軍お中將実守石捕らむゆ 云 中院 皇 〇龜山天皇
 去ろ〜〜た〜あ〜りお開えあり〜、心〜〜き〜ゆ
 ないひあり〜あ〜とあ〜ま〜、中宮の所せ〜と権大夫公
 衡、一院 皇 〇後深草天の御前も〜此事、猶禪林寺殿 〇龜
 皇 〇乃清心合せたる形〜、後醍醐院の所委を引表
 へ、京よりあ〜當代を〜とま〜り 〇後醍醐天皇ノ御庭分
 二即ケレテ見天皇ヲ位世を去ろ〜〜あ〜る事を、いよ〜
 おお〜より〜、世を傾け給へんの御本意あり、さ〜あ
 だ〜ら〜あ〜あ〜ま〜ま〜さ〜や〜あ〜あ〜ん、院 〇
 山天皇を、お波羅も移〜奉〜るべきと〜を〜、かの〜あ〜り
 係も引出〜〜移〜へ、い〜、い〜あ〜あ〜あ〜おお
 〇後深草天皇ノ以〜〜さ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 事をも人ハよ〜い〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ
 〇後醍醐天皇ノ御庭分
 〇後醍醐天皇のあき

同書卷八ハ 德治三年云八月のちとめつうたより内

子〇後二條天皇例ありてはあを云廿五日

子の時を〇富仁親王ニテ

親所殿へ行啓ありて〇八月廿六日云踐祚あり

云 持明院殿〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

大覺寺殿〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

皇立繼承簿 長一ノ一

ちみ陽行ひるのこ心入路へるふひとらるるわがせバ、と

の夏の頃定房は太納言東へをささる、御門皇〇後醍醐天

天の下は事議ありてさむの御消息あるべし、大いりハハ

あさましくありてをたむ世もこそあめき、かむつりのゆい

父御門は陽心ふいとやましく任せぬ厚きをのせとめさあし、

さきどきのふけあ子をたまりたりあもあは、承久よりこ

あさかくのみありてて来りけむバあり〇承久ノ大乱ア

軍ニ克チ、後鳥羽土御門順徳ノ三上皇ヲ遠國ニ遷幸ナサシ

位ニ承承ノ事ハ北條氏ノ奏スル所ニ定マリ、四條天皇後醍

天皇後深草天皇龜山天皇後宇多天皇伏見天皇後光厳

後二條天皇花園天皇後醍醐天皇多上院中ニ條氏ノ奏請ニ

ヨリテ定マシ、因テ今上後醍醐天皇多上院中ニ條氏ノ奏請ニ

決スルニ懶シ、因テ今上後醍醐天皇多上院中ニ條氏ノ奏請ニ

時ニ欲ス、而シテ徑テ今上後醍醐天皇多上院中ニ條氏ノ奏請ニ

機ニ後醍醐天皇御方々〇後宇多天皇ノ云御〇尊治親

況ニ皇位ノ繼承ニ於ケル北條氏ニ告ゲ共ノ皇ニ徒ハザルヲ

得ザルナリ、當時ノ形勢ヲ察ス内皇ヲイフ
 選部あるは形勢の後きたるき、〇後醍醐天皇は遠く、其の上
 〇東より中より、〇定房 秘あく帰りに行りぬ、陸心の
 〇後宇多法皇の文敏豫定
 〇伏見天皇同十月廿一日御位ニ
 〇梅松論ヲ引テ以テ其ノ本ホヲ詳ニス

定策非例

権臣兩皇統迭立ノ議ヲ建テ定メテ治世ノ期限ヲ
 十年トセシ事

兩皇統迭立ノ策ハ鎌倉執權北條貞時、伏見天皇

ノ密勅ニ從テ定策セシ所ノ者ナリ

保督間記下卷 弘安十年當今〇後宇多天 御位ヲスベラセ

給フ、今度ハ後深草院ノ御子〇伏見天皇 同十月廿一日御位ニ

付セ給ケリ、先帝ヲバ大覺寺殿ト申ス、御追跡ヲバ後宇多院

トゾ申ケル、是ヨリ後ハ兩院ノ御未打替々々位ニ付セ給ヒ

ケリ、〇梅松論ヲ引テ以テ其ノ本ホヲ詳ニス

梅松論上卷 爰ハ後深草院寛元年中ハ崩御ノ初〇後

天皇ハ寛元ノ帝ニシテ、崩御ハ文永九年ナリ、〇遠祖子室

ノトコロ大誤レリ、文永九年ノ事ト見ルベシ、

の降子後深草院御即位あり、ありぬは後ハ長祿寺

領百八十ヶ所を御飯々々々御子孫永く在位此を

めらるる、次子ニは御子龜山院御即位あり、

母ハ累代教々断絶あるを、子細有る依々ありと

〇寛元年中ノ事ニハ非ス、其詳ナルコトハ上文定

皇立繼承本義 卷之六

伊子孫をあらわす、天下のたえとく元より関东の安寧を
 思ふ所ありと仰下さるるに於て、依て孫系より考〇龍山天
 皇ヲとらるるを、伊在位は事ありとハ一の伊多後
 深草院、二の伊子孫龜山院の西伊子孫、十年を限りお勤く
 伊治世あり度きよしをうとひし旨〇此ノハカラヒハ北
 後醍醐院の伊時宗今〇後醍醐天は勅使ハ吉田大納言
 定房卿、持昭院〇後伏見天は伊使ハ日野中納言の二
 男の仰、京都蓮倉は伊治世再之る及び、勅使と院の伊使
 と商人、冥途におりて同答事多しとらんども〇幕府ノ
ケンガタメ、鎌倉ニ於テ問答アルナリ、定房卿ハさきけり、既ハ後深草院の
 伊遺勅を任せり、一ハ伊子孫深草院の伊子孫長祿堂
 領を以て今ハ伊管領あらん、二の伊子孫龜山院の伊子
 孫ハ累代お遺ありて、うらぎらるる所、関东の伊治とくをさる

小及て伊史更にその伊を詳し、伊子孫〇後醍醐天皇、伊が
 位の領事篇を絶て、篇を盡し、伊とくをさるる所、
 篇たり人ハ是れ、伊あらざるよし、再三仰下さるるよし
 つて〇コレ迄ハ定房卿ノ已前ノ事ヲ引出テ、當今後醍
天ノ皇ノ御治世ト定リレユトヲ陳ベラル、ナリ二の
 伊子の伊子孫後醍醐院、伊禪を受給ひて元應元年あり
 元弘元年あり、伊在位の旨、今おおりの後深草院の伊史
 秘治室より、元徳二年〇元徳二年ハ誤ニ、お持昭院乃伊
子即光嚴天皇ナリ立坊は、伊あり、以て伊の次あり、元後醍
 醐院我神武は、伊を関く、元下とく、天下は伊を定
 るる、伊をさるる、且ハ後深草院の院の伊史あり、遺勅をさる
 り、伊事天命のむどや、たやま、伊在位十年を限り
 伊史あり、伊史を定中とく、伊史、長祿を領とく、伊史満
 年伊在位の時ハ、伊治世とく、長祿を領とく、伊史満
 皇位繼承篇 卷之六

御鳥宮癸未至吉野而居之是時聚諸舍人謂之曰我今入道脩
行故隨彼脩道者留之若仕欲成名者選仕於司然無退者更聚
舍人而詔如前是以舍人等半留半退十二月天命閑別天皇崩
○天武天皇壬申ノ年ヲ以テ弘文天皇ト戰ヒ、速ニ之ニ克ツ
事ハ省トテ載セズ、天皇ノ御遷俗ノ事ハ次下ニ引ク所ノ愚
管抄ニ
詳ナリ

天武天皇紀下 二年春正月癸巳置酒宴群臣二月丁巳朔癸
未天皇命有司設壇場即帝位於飛鳥淨御原宮

愚管抄卷三 天智十年たつち孫入云 云 加又天智の時

弟、腹トヤウク、齋咽天皇、まを、おま、中、く、天武天
皇を東言とく、沙位をひきうつ、孫入、く、り、り、
を天智孫、孫子大友皇子とく、おま、中、く、けるを、太
政大臣おま、く、おま、中、く、沙、の、く、る、を、
ざり、り、り、や、天武、ゆらん、と、けん、位を辭、孫、ひ、く、は、出

家ありく吉野山を籠り居り世終りまは、天智大お籠り
く、南、津、野、り、と、後、大友皇子いくさを起、く、吉野山と
政、を、く、ん、と、ま、り、時、大友の此、く、ま、く、天武天皇の時、孫、の
おま、く、ま、ま、バ、ゆ、く、の、や、く、教、を、孫、ん、子、を、思、く、ま、や
思、を、けん、か、く、る、事、出来、く、る、由、を、君、や、う、ま、吉野山へ、若、未
ら、せ、ら、ま、たり、り、く、ま、を、中、孫、へ、た、る、是、を、使、く、ら、い、の、子、我
ハ、わ、ま、ま、よ、く、あ、く、思、ひ、く、出、家、お、及、び、く、入、籠、り、た、り、を、お
く、及、ら、ま、ん、こ、ま、と、て、若、野、山、を、ゆ、く、出、家、此、形、を、ま、く、を、伊
勢、を、神、宮、を、擇、み、居、て、美、濃、尾、張、の、勢、を、傳、く、お、ま、く、く、
此、江、國、の、大友皇子軍を設け孫ひたり、り、り、子、孫、世、幾、ひ、く、
天武天皇の時、孫、ま、け、ま、は、大友皇子の首をとりて、その時、大
右大臣大友皇子孫、孫、方、を、ま、あり、ま、ま、を、く、同、と、く、首、を、と
り、或、ハ、流、く、あ、く、く、く、頓、く、位、を、つ、ま、く、世、を、治、め、孫、ひ、く、

大臣禪師之位方授未都事乎諸聞食止宣復勅久天下乃人誰
曾君乃臣不在武安良心淨天久之仕奉良武此之實能朕臣仁在武
夫人止之己或先祖乃名乎興繼比呂武不念阿流不在是以
天明久淨岐心以天仕奉方氏氏門方絕方須治賜止勅御命乎
諸聞食止勅又宜仕奉狀爾隨天冠位阿氣賜治賜止久宣

皇位繼承非例

神器無クシテ皇位ヲ繼承セシ事

神器ハ天照大御神始テ皇孫瓊瓊杵尊ニ賜フ所
ノ者ナリ、而シテ奕世天皇コレヲ相承シ以テ護
身ノ器ト為スト古護身ノ器ト為スコ故ニ踐祚ノ
日群臣必コレヲ天皇ニ獻ジ、以テ萬世ヲ祝スル
モ亦上古以來不易ノ典ナリ、天皇神器ヲ受ケズ
シテ踐祚スルハ恒典ニアラズ

- 後鳥羽天皇 光嚴天皇 光明天皇 崇光天皇
- 後光嚴天皇 後圓融天皇 後小松天皇

○後鳥羽天皇

玉海 壽永二年八月六日戊云 此日參院以定能卿申入、以
頭辨兼光被仰下云、立王事所思食煩也、先可奉待主上○安徳
ヲ還御哉、將又且雖無劍璽可奉立新主哉之由、被行御卜之處、
官察共申可被奉待主上之由、而於此事依有思食重被問官察
各數人官二人申狀彼是不同、但吉凶半分也、此上事何様可有
沙汰哉、可計申矣、申云○官察ノ先次第沙汰頗以依運歟、先有
議定人意不一決、偏可訪占卜之由、議奏之時可有御卜也、而遮
以被行御卜、今又被乖彼趣之條、太以無其謂卜吉不再三云
而及度々之條、又以不可然、而於今者偏可被用卜吉、重隨良將
吉神慮之趣可有斟酌歟、但愚按之所及立王之事、懈怠愚心所

願思也、其故先京華狼藉于今不止、是人主不御座之令然也、一
 次須被□□之處平武族平家ノ一等奉具主上及三神寶主
 有已赴海西不立征伐於議有妨是次我朝之習不得劍璽踐祚
 曾無例而繼體天皇為臣下被迎之時、如國史文之踐祚、甲申天
 皇移樟葉宮、辛卯得璽符鏡劍即位云雖無踐祚即位之分別
 如今文□即位以前已稱天皇、又謂踐祚被移皇居其後得劍璽
 即位云然則準據尤可合之由所存也是凡天子之位一日不
 可曠政萬機悉亂云於今逢々之條萬事違亂之源也、早速可
 有沙汰不可有異議者、左大臣同參候云非一所無光頭并
 參上小時飯來云所申可然、就中為征伐可奉立人主之條事
 了肝心也、仍早可有立人主之事云先愚按次第之沙汰悉以
 違亂散々凡不能左右云未曾有之事也天下滅亡只此時也
 可悲云八月廿日壬子天晴、此日有立皇事云不得劍璽踐

祚之例希代之珍事也

增鏡卷七のり 涉門そま ハ十二代もあつり
て、後鳥羽院とヤあそり中へき、涉りてあハ学政、あき
 高倉院中四北涉子云壽永二年八月廿日涉幸四
りく、信よつり女路ひたり、内侍所、神靈宿願ハ讓位の
時必渡りてとあきと、先帝花紫もあきあき、あき
バ、こたみそとめく云北涉、あきあき、あき
なりぬぐ、後まど内侍所去り、北涉あきをり、修り
たなり、あきと、宿願ハ信ひ先帝の海も入修あ時、
涉身もあき、沈もあきと、あきあき、あき
涉門元慶元年七月廿日涉即位、北涉あきの事あきの
あきあきあき

○光嚴天皇

皇年代略記 光嚴院諱量仁云 元弘元年未九月廿日踐祚

十被下太上天皇皇○花園ノ天詔命于時劍璽不渡之壽永之例也

十月六日渡劍璽自六波羅奉渡土御門東洞院皇居或說神璽

聊有子細云云真○神璽聊有子細トアルハ神器ノ

毘沙門堂所藏記 太上法皇皇○光嚴院天云 元弘元年九月廿

日踐祚云 劍璽使 舊主皇○後醍醐天御隨身之間不及沙汰

今年十月五日自六波羅被渡土御門東洞院內裏○十月六日

真ノ神璽ニ非ラズ此ノ事委シクハ三種神璽ノ條ニ辨ズ

○光明天皇 皇年代略記 光明院諱豐仁云 建武三年八月十五日踐

祚七於權大納言良基卿押小路第有此儀合戰雖未止之依難

默止武家申行之年彌又廢延元復建武三年云 以被行次第

事其儀供被摸壽永例云云同廿二日幸東寺以為御所十一月

二日賢所劍璽渡御自花山院被渡東寺行宮

毘沙門堂所藏記 法皇皇○光明天云 建武三年八月十五日

踐祚云 劍璽使 舊主皇○後醍醐天御隨身之間不及沙汰今

年十一月二日自花山院第舊主自山門被渡新主○十一月二

日皇○真ノ劍璽ニ非ズ此ノ事委レクハ三種神璽ノ條ニ辨ズ

○崇光天皇 皇年代略記 崇光院諱興仁云 貞和四年十月廿七日踐祚

五十 毘沙門堂所藏記 新院皇○崇光天云 貞和四年十月廿七日

踐祚云 劍璽使 云非○時ニ神器アリト雖ドモ真ノ神璽ニ

三日後村上天 皇奉還ス

○後光嚴天皇

皇年代略記 後光嚴院諱彌仁云 觀應三年八月十七日

踐祚十五未立親今日先立親王當日自持明院殿渡土御門殿

云今度不被行節會不及宣命不被渡劔璽以下每事新儀兼
日被問諸卿有此沙汰也堅固密儀也

毘沙門堂所藏記後光嚴院云觀應三年八月十七日踐祚
云宣命劔璽不及沙汰皇時吉野ノ宮ニアリ

○後圓融天皇

皇平代略記後圓融院諱緒仁云應安四年三月廿一日立
親王同廿三日父帝後光嚴先退本宮幸忠光卿室町原柳亭被行
親王冠禮并讓國之儀平安城宮遷御之後於城外里内被行此
儀之條今度為新儀歟

後深心院闕白記應安四年三月廿三日陰云今日天皇
光嚴天皇讓位也儲王後圓融天皇ナリ於柳原内裏清涼有
御元服事云未刻節會始云云事了人人參新帝御所
渡無劔璽

供内侍野渡御云云時ニ神器ハ
後龜山天皇ノ吉野ノ宮ニアリ

○後小松天皇

皇年代略記後小松院諱幹仁云永德二年四月七日著袴
十一日受禪皇時ニ神器ハ後龜山天皇云明德三年閏七月三
日南方主皇後龜山天皇令和睦遷御于大覺寺令駕三種神器
同渡御同五日神器等奉渡于里内皇土御門東洞院○後小松天
皇是ニ於テ神器ヲ後龜山

皇位繼承餘論

皇位ハ子孫相承クルヲ以テ常規トスベキ議アリ

懷風藻葛野王傳高市皇子薨後皇太后持統ノ大引王公卿士於

禁中謀立日嗣時群臣各執私好衆議紛紜王葛野王ヲイ
皇ノ長進奏曰我國家為法也神代以來子孫相承以襲天位若

兄弟相及則亂從此興、仰諭天心誰能敢測、然以人事推之聖嗣自然定矣、此外誰敢聞然乎、弓削皇子在坐欲有言、王子叱之乃止、皇太后嘉其一言定國、特闕授正四位拜式部卿、時年卅七

重祚ノ事

重祚ハ天皇再タビ皇位ヲ繼承スルヲイフ、重祚ハ必ス事故アリ、次下ニ舉ル所ヲ以テ其ノ概略ヲ知ルベシ

齊明天皇

稱徳天皇

〇齊明天皇 皇極天

齊明天皇紀 皇再祚 天豐財重日足姬天皇 〇皇極天云 四年六月讓位於天萬豐日天皇 〇孝徳天 稱天豐財重日足姬天皇曰

皇祖母尊、天萬豐日天皇後五年 〇後五年八月十月崩 〇皇極天

元年春正月甲戌皇祖母尊即天皇位於飛鳥板蓋宮 〇皇極天

德天皇ニ譲ル、因テ稱レテ皇祖母尊トイフ、孝徳天皇崩ズ、天皇因テ再祚ス、天皇再祚ノコト此ニ始ル

稱徳天皇 皇再祚

水鏡下卷 獲帝 〇淳仁天云 太上天皇 〇孝徳天 是たま

を位まつけんといふことをわたり、官のおとせきして

國へ遣して人の心をたぶらう、関をわめ兵をおこし、罪

もあうりたるあのをみ豊成の大臣を、降し、中々位を退け

たりけり、此事仲廣が推する事として、孫ひぬ、豊成を

とのめく大臣の位を治り孫ひ、又大の禪師 〇弓削道 鏡ヲイフ

子に、あうりたるあり極を忍ぶふいと、世のまつりごとをせざ

り、佛の浄衆衆をきく、あはれども、世のまつりごとをせざ

るん、きよあまび、佛も孫ひ國王位よつき孫ひんをり、善徳

戒を受よとを洗おき孫ひたは、あまを思人バ厄とありて

大、世のまづりごとをせん、何の障りあるべき、後世は帝
 の出家し、いません、又出家し、あらん、大臣もあつべ
 と思ひ、おの道鏡探師を大臣探師と位を授け、
 と死たまひせし、十月九日、太上天皇、兵をたてし、内裏を
 園に移し、このが、宮の中、候し、人々皆、途失し、このが、帝
 母、又其つらまづり、人二三人をうり、お具し、おちり、
 圖書寮の方、おそし、立給へり、このを、お納言、迎奉
 り、位をおろし、存る由の重命を、バ、續け、有りし、
 こと、むる、位を保ち、移し、べき、うつを、世のおを、せぬ、おの、世
 と、仲廣と、同ト、ゆき、日世を、そ、あ、ちん、と、ちり、移し
 たり、おま、バ、帝位を、退け、移し、親王の位を、賜へ、
 給の、園へ、流し、移し、ひき、ふ、う、けり、し、と、あり
 同書 次のみ、う、と、稱徳天皇と、ちき、おれ、ハ、孝謙天皇、
 又

う、り、つ、き、移、り、し、あり、天平寶字八年十月九日、位、つ
 き、移、り、

重祚ニ似テ重祚ナラザル事

〇後醍醐天皇

増鏡卷十月末 北 みやらるる名伯耆より、此還師 〇後醍醐
者 還御ナリ ノ とき、世の中、ひ、め、く、ま、ら、東寺へ、
 ひ、こ、と、ら、も、定め、ら、る、二條の前の、お、と、道台、あり、
 春、り、移、へ、り、あ、ら、み、内裏へ、い、せ、移、ふ、べき、儀、重祚、あ、ど
 り、て、何、る、座、を、せ、ど、も、重祚、を、御、身、に、入、ら、せ、た、ま、は、
 た、だ、遠、き、行、幸、の、遠、所、の、式、を、あ、ら、座、き、由、定め、ら、る、云
 云、六月六日、東寺より、常の行幸、は、さ、ら、ぬ、
 京へ、ぞ、い、せ、移、ひ、け、ら、ぬ、
 神皇正統記下卷 六月四日 〇元弘三 東寺より、入らせ、移、り、

○後醍醐天皇 都みある人々もあつて集りしつゝ成候を
 選幸ヲイフ 此人の宮も遷幸しつゝ成候の宮もあつて、西
 院○後伏見天皇花新帝皇ヲ光嚴天をが宥め申候ひつゝ新
 子皇ヲ光嚴天をが宥め申候ひつゝ新
 隱岐ヨリ京師ニ入ルニ還幸ノ儀ヲ 西位少弐用おらむを改
 以テスレバ重祿ニアラザルナリ 西位少弐用おらむを改
 えつゝ西院といひつゝを本のみくえ弘と号せらる

上世ハ皇弟ト雖ヘドモ勲績アレバ皇兄コレニ皇
 位ヲ讓ル皇弟乃チ皇兄ノ讓ニ從テ皇位ヲ繼承セ
 レ事

綏靖天皇 顯宗天皇

○綏靖天皇 紀首 神日水繁余彦天皇○神武天崩時神淳名川
 耳尊○神日水繁余彦天皇 皇ヲイフ天崩時神淳名川
 耳尊○神日水繁余彦天皇 皇ヲイフ天崩時神淳名川

兄手研耳命行年已長久歷朝機故亦委事而親之然其王立操
 厝懷亦乘仁義云 云 已卯十一月神淳名川耳命與兄神八井耳
 命陰知其志云 云 時神淳名川耳尊擊取其兄所持弓矢而射手
 研耳命一發中胸再發中背遂殺之於是神八井耳命慙然自服
 讓於神淳名川耳尊曰吾是乃兄而懦弱不能致果今汝特挺神
 武自誅元惡宜哉乎汝之光臨天位以承皇祖之業吾當為汝輔
 之奉典神祇者是即多臣之始祖也○コノ時神淳名川耳尊神
 少上世日嗣皇子トイフ事ハ後世ノ皇太子ノ如クニシテ
 少上世日嗣皇子トイフ事ハ後世ノ皇太子ノ如クニシテ

○顯宗天皇

顯宗天皇紀首 白髮天皇○清寧天聞喜咨歎曰朕無子也可
 以為嗣云 夏四月立億計王皇ヲ仁賢天為皇太子立天皇為皇
 子五年春正月白髮天皇崩是月皇太子億計王與天皇讓位久
 而不處由是天皇姉飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政云

十一月既豐青尊崩云十一月百官大會皇太子億計取天皇
之寶置之天皇皇之坐再拜從諸臣之位曰此天皇之位
有功者可以處之著貴蒙迎皆弟之謀也以天下讓天皇天皇顧
讓以弟莫敢即位又奉白髮天皇先欲傳兄立皇太子前後固辭
曰云所貴為人弟者奉兄謀逃脫難照德解紛而無處也即有
處者非弟恭之義弘計不忍處也兄友弟恭不易之典聞諸古老
安自獨輕皇太子億計曰白髮天皇以吾兄之故舉天下之事而
先屬我我其羞之惟大王皇道建利道聞之者歎息彰顯
帝孫見之者殞涕憫憫摺紳祈荷戴天之慶哀哀黔首悅逢履地
之恩是以克固四維永隆萬業功隣造物清猷映世超哉邈矣粵
無得而稱雖是曰兄豈先處乎非功而據咎悔必至吾聞天皇不
可以久曠天命不可以謙拒大王以社稷為計百姓為心發言慷
慨至于流涕天皇於是知終不處不逆兄意乃聽而不即御坐世

嘉其能以實讓曰宜哉兄弟怡怡天下歸德篤於親族則民興仁
元年春正月己巳朔大臣大連等奏言皇太子億計皇仁賢天聖
德明茂奉讓天下陛下皇正統當奉鴻緒為郊廟上承續
祖無窮之烈上當天心下厭民望而不肯踐祚遂令金銀蕃國群
僚遠近莫不失望天命有屬皇太子推讓聖德彌盛福祚禮章在
彌而勤謙恭慈順宜奉兄命承統大業制曰可乃召公卿百僚於
近飛鳥八鈞宮即天皇位百官陪位者皆忻忻焉

皇太子及皇子剔髮レテ皇位ノ繼承ヲ辭セシ事

古人大兄皇子 大海人皇子

○古人大兄皇子

孝德天皇紀係四年皇極天皇ノ四年ニシテ六月云天
豐財重日足姬天皇皇授爾綏禪位策曰咨爾輕皇子孝
德天皇云云輕皇子再三固辭轉讓於古人大兄大市皇子曰大

兄命是昔天皇〇舒明天皇所生而又年長以斯二理可居天位於是古人大兄避座遠巡拱手辭曰奉順天皇聖旨何勞推讓於臣臣願出家入于吉野勤修佛道奉祐天皇辭訖解所佩刀投擲於地亦命帳內皆令解刀即自詣於法興寺佛殿與塔間剔除髻髮披著袈裟由是輕皇子不得固辭外壇即祚

○大海人皇子

天智天皇紀 十年十月庚辰天皇疾病彌留勅喚東宮〇天武天皇引入卧内詔曰朕疾甚以後事屬汝云云於是再拜稱疾固辭不受曰請奉洪業付鶴太后〇倭姬王令大友王奉宣諸政臣請願奉為天皇出家脩道天皇許焉東宮起而再拜便向於内裏佛殿之南踞胡牀剃除髻髮為沙門

天皇皇族ニ命ビテ皇位ヲ繼承セシメント欲シ豫テ後事ヲ付囑セシ事

○市邊押磐皇子

雄略天皇紀前三年〇安康天皇冬十月癸未明天皇〇雄略天皇恨穴穗天皇〇安康天皇曾欲以市邊押磐皇子傳國而遙付焉後事云云

皇子ノ皇后ヲシテ皇位ヲ繼承セシメントセシ事

皇后春日山田皇女 皇后倭姬王

○皇后春日山田皇女

欽明天皇紀前四年〇宣化天皇冬十月武小廣國押盾天皇〇宣化天皇崩皇子天國排開廣庭天皇〇欽明天令群臣曰余幼年淺識未閑政事山田皇后〇山田皇后仁賢天皇ノ皇女明開百揆請就而決山田皇后怖謝曰妾蒙恩寵山海詎同萬機之難婦女安預乎皇子〇欽明天者敬老慈少禮下賢者日中不食以待士加以幼而顛脫早擅嘉聲性是寬和務存於宥請諸臣等

早令登位光臨天下冬十二月甲申天國排開廣庭皇子即天皇位

○皇后倭姬王

天智天皇紀 十年十月庚辰天皇疾病彌留勅喚東宮○天武引入卧内詔曰朕疾甚以後事屬汝云於是再拜稱疾固辭不受曰請奉洪紫付媯太后○倭姬王ヲイフ倭姬王ハ古人大后ナ令大友王奉宣諸政臣請願奉為天皇出家脩道天皇許焉

皇位繼承篇卷之六終

皇位繼承篇卷七

議官 福羽美靜 檢閱
少書記官 横山由清
大書記生 黒川真頼 編集

踐祚

天皇崩ス皇太子皇太弟皇子皇女及諸王代テ皇位ヲ繼承ス是ヲ天津日嗣志良須トイフ即踐祚ナリ天智天皇ノ齊明天皇七年七月ヲ以テ皇位ヲ繼承シテ後八歳ヲ經テ即位ノ禮ヲ行フ已ニ踐祚シテ此ニ踐祚ト稱スル者ハ天更ニ即位ノ禮ヲ行フコト此ニ始ルクハ次下ニ辨ス踐祚トイヒ即位ト稱スルコト之ヲ文字上ニ於テ論ズレバ即一ナリ而レドモ天智天皇以來由テ来ル

皇位繼承篇 卷之七

之地無復風塵誠宜厥廓皇都規摹大壯而今運屬此屯蒙民心
朴素巢棲穴居習俗惟常夫大人立制義必隨時苟有利民何妨
聖造且當披拂山林經營宮室而恭臨寶位○神武天皇ノ踐祚
以鎮元元上則答乾靈授國之德下則弘皇孫養正之心然後
兼六合以開都掩八紘而為宇不亦可乎觀夫畝傍山西南極原
地者蓋國之隩區乎可治之是月即命有司經始帝宅○神武天皇
踐祚○神武天皇始於攝原宮○神武天皇踐祚○神武天皇始於攝原宮
辛酉年春正月庚辰朔天皇即帝位於攝原宮○神武天皇踐祚○神武天皇
躡五十鈴媛命以為正妃

辛酉年春正月庚辰朔天皇即帝位於攝原宮○神武天皇踐祚○神武天皇
躡五十鈴媛命以為正妃

踐祚ノ嚴飾ヲ衆人ニ縱觀セシメシ事

古語拾遺 妖氣既晴無復風塵建都攝原經營帝宅云云爰仰

皇天二祖之詔建樹神籙所謂高皇產靈神皇產靈魂留產靈生
產靈足產靈大宮貴神事代主神御膳神○神武天皇踐祚○神武天皇
神豐樂間戶神○神武天皇踐祚○神武天皇
門掌其闕饒速日命帥內物部造備矛盾○神武天皇踐祚○神武天皇
懸瓊玉陳其幣物○神武天皇踐祚○神武天皇
祭宮門○神武天皇踐祚○神武天皇
四方之國以觀天位之貴

舊事紀卷四 神武天皇云辛酉為元年春正月庚辰朔都攝
原宮肇即皇位尊正妃媛踏躡五十鈴媛命立為皇后則大三輪
大神女也宇摩志麻治命奉獻天瑞寶乃豎神楯以齋亦立今木
亦五十鈴刺繞於布都主劍大神崇齋殿內藏于十寶以侍近宿

因號足尾其足尾之號從此而始矣天富命率諸忌部捧天璽鏡
劍奉安正殿齋部氏神器天種子命奏天神壽詞即神世古事
類是也宇麻志麻治命率內物部乃豎矛楯嚴增威儀也道臣命
帥來目部護衛宮門掌其開闔矣茲令四方之國以觀天位之貴
亦俾率土之民以示朝廷之重者也天皇踐祚之時眾庶共
以此知ルベシヲ
踐祚異例

應神天皇母后ノ胎中ニ於テ踐祚ノ事

○應神天皇

神功皇后紀首 一云足仲彥天皇仲夜天居筑紫攝日宮是
有神託沙麼縣主祖內避高國避高松屋種以誨天皇曰御孫尊
也若欲得寶國耶將現授之使復曰琴將來以進于皇后則隨神
言而皇后撫琴於是神託皇后以誨之曰云時天皇謂皇后曰

聞忠事之言婦人乎云於是神謂天皇曰汝王如是不信必不
得其國唯今皇后懷妊之子○應神天皇蓋有獲歟
繼水ニシコトヲ豫テ神ノ告タルレバ此ニ揭
古事記中卷 帶中日子天皇○仲夜天云御子大鞞和氣命
亦名品陀和氣命云此太子之御名所以負大鞞和氣命者初
所生時如鞞突生御腕故著其御名是以知坐腹中定國也○復
坐ニテ國ノ定ハルノ文アリ因テ按タルニ應神天皇母后
胎中ニ在テ皇位ノ純承セシコト確然ダリ又體天皇紀六
年十二月ノ條ニ曰ク夫住吉神勅以海表金銀之國高麗百濟
新羅任那投胎中興田天皇トアリ亦以テ徽トスベキナ
化天皇紀元年五月ノ條ニ胎中ス如シ亦以テ徽トスベキナ
以テ胎中天皇ト稱セシコト斯ノ如シ亦以テ徽トスベキナ

清寧天皇ノ踐祚ノ事

歷世ノ天皇神器ヲ受ケテ即踐祚ス清寧天皇獨
然ラズ先神器ヲ受ケ後三月ヲ經テ踐祚ス故ヲ

以テ更ニ此ニ掲載ス

○清寧天皇

清寧天皇紀首 二十三年○雄略天皇ノ冬十月壬申大伴室屋大連率臣連等奉遷於皇太子皇ヲ清寧天元年春正月壬子命有司設壇場於磐余甕粟陟天皇位
即位

天皇即位ト稱スルハ天皇先皇位ヲ繼承シ而シテ後皇位ニ即クノ禮ヲ行フヲイフナリ天皇皇位ヲ繼承シテ後即位ノ禮ヲ行フ事ハ天智天皇ニ始ル○天智天皇ヲ以テ即位ノ禮ヲ行フノ始ノ元明天皇以下歷世ノ天皇皆近江大津宮天皇御宇天皇ノ文タル法ニ倣フノ節ニ據ル天皇皇位ヲ繼承スト雖ヘドモ而レドモ仍皇太子ト稱セシコト六年ナリ七年ニ至テ天皇ト稱シ以

テ即位ノ禮ヲ行フ○天武天皇ノコ持統天皇モ亦皇位ヲ繼承シテ仍皇后ト稱セシコト四年ナリ御宇ノ四年ニ至テ始テ天皇ト稱シ以テ即位ノ禮ヲ行フ元明天皇モ亦皇位ヲ繼承シテ仍皇女ト稱セシコト慶雲四年六月ヨリ七月ニ至テ三十餘日ナリ七月ニ至テ始テ天皇ト稱シ以テ即位ノ禮ヲ行フ光仁天皇モ亦皇位ヲ繼承シテ仍皇太子ト稱セシコト神護景雲四年八月ヨリ九月ニ至リテ二月ナリ同年十月ニ至テ始テ天皇ト稱シ以テ即位ノ禮ヲ行フ是等皆歲月ヲ歷テ後各即位ノ禮ヲ行フ文武天皇ハ持統天皇ノ八年八月一日皇位ヲ繼承シテ即日即位ノ禮ヲ行ヒ元正天皇モ亦靈龜元年九月三日踐祚シテ

皇位繼承篇 卷之六

即日即位ノ禮ヲ行ヒ、聖武天皇孝謙天皇淳仁天皇モ亦踐祚ノ日即位ノ禮ヲ行フ、是等皆即位ノ禮ヲ行フコト踐祚ノ日ニ在リ、因テ按ズルニ故事ニ新主即位ノ禮ヲ行テ始テ天皇ト稱セシコト瞭然タリ、降リテ桓武天皇ニ至テ皇位ヲ繼承シテ即位、天皇ト稱シ、而シテ後即位ノ禮ヲ行フ、是ヨリ後歷世ノ天皇多ク此ノ故事ニ倣ヒ踐祚ノ日即、天皇ト稱ス、而シテ即位ノ禮ヲ行フニ至テハ、或ハ即日コレヲ行ヒ、或ハ歲月ヲ經テコレヲ行フ、其ノ跡一ナラス、故ニ次下ニ掲載シテ以テコレヲ詳ニス

- 天智天皇 弘文天皇 天武天皇 持統天皇
- 文武天皇 元明天皇 元正天皇 聖武天皇

- 孝謙天皇 淳仁天皇 稱徳天皇 光仁天皇
- 桓武天皇 平城天皇 嵯峨天皇 淳和天皇
- 仁明天皇 文徳天皇 清和天皇 陽成天皇
- 光孝天皇 宇多天皇 醍醐天皇 朱雀天皇
- 村上天皇 冷泉天皇 圓融天皇 花山天皇
- 一條天皇 三條天皇 後一條天皇 後朱雀天皇
- 後冷泉天皇 後三條天皇 白河天皇 堀河天皇
- 鳥羽天皇 崇徳天皇 近衛天皇 後白河天皇
- 二條天皇 六條天皇 高倉天皇 安徳天皇
- 後鳥羽天皇 土御門天皇 順徳天皇 仲恭天皇
- 後堀河天皇 四條天皇 後嵯峨天皇 後深草天皇
- 龜山天皇 後宇多天皇 伏見天皇 後伏見天皇
- 後二條天皇 花園天皇 後醍醐天皇 後村上天皇

後龜山天皇 光嚴天皇 光明天皇 崇光天皇

後光嚴天皇 後圓融天皇 後小松天皇 稱光天皇

後花園天皇 後壽門天皇 後柏原天皇 後奈良天皇

正親町天皇 後陽成天皇 後水尾天皇 明正天皇

後光明天皇 後西院天皇 靈元天皇 東山天皇

中御門天皇 櫻町天皇 桃園天皇 後桃園天皇

光格天皇 仁孝天皇 孝明天皇 今上

○天智天皇 齊明天皇辛酉歲七月廿四日踐祚

天智天皇紀 七年春正月丙戌朔戊子皇太子○中大兄皇子

即位○或本云六年歲次丁卯三月即位○或本云說今

成の○弘文天皇天智天皇十年十二月五日踐祚

扶桑略記卷五 天智天皇十年辛未云十二月三日天皇崩

同月五日大友皇太子○大友皇太子ハ即為帝位生五年

水鏡上卷 天武天皇云天智天皇十二年二月廿三日踐祚

帝王編年記卷十 天武天皇云白鳳元年壬申即位○此即

天武天皇紀 二年云二月丁巳朔癸未天皇命有司設壇場

即帝位於飛鳥淨御原宮○大武天皇位ヲ継承スルノ年

武天皇ノ弘文天皇ニ克クテ八月ノ野上ノ宮ヲ遷シテ

承平ノ君ニ非ズバ安ゾコノ制ヲ稱スルコトアリ皇位ヲ繼

同書ニ云クヤフ七日右大臣武原武王ノ御宇ニシテ

の不ウノ人ヲつミをカテスルコトヲ命ジテ

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

皇位繼承書 卷之七

云云トアリ亦以テ皇位ノ繼承スルノ君ナルヲ知ル因テ姑ク弘文天皇崩スルノ日ノ以テ文武天皇ノ皇位ヲ繼承スル後ノ考ヲ俟ツ

○持統天皇 朱鳥元年九月九日踐祚 御宇四年正月一日即位

持統天皇紀 四年春正月戊寅朔物部麻呂朝臣樹大盾神祇

伯中臣大島朝臣讀天神壽詞畢忌部宿禰色大知奉上神璽劍

鏡於皇后皇ヲ持統天皇皇后即天皇位公卿百寮羅列匝拜而拍手

焉

○文武天皇 持統天皇八年八月一日踐祚 神武天皇八年八月一日即位

文武天皇紀 高天原廣野姬天皇皇ヲ持統天皇十一年立為皇

太子八月甲子朔受禪即位 持統天皇十一年トアルハ持

○元明天皇 慶雲四年六月十七日即位 元明天皇紀ニ記セル所ノ八年ナリ

元明天皇紀 慶雲四年六月豐祖父天皇皇ヲ文武天皇崩庚寅

天皇御東樓詔召八省卿及五衛督平等告以依遺詔撰萬機之

狀秋七月壬子天皇即位於大極殿詔曰現神八洲御宇倭根子

天皇 ○倭根子天皇ハ即日本天皇 詔旨勅命親王諸王諸臣百

官人等天下公民衆開宣開 威威 藤原宮御宇倭根子天皇 ○

統天皇丁酉八月 此食國天下之業乎日並知皇太子之嫡子

今御宇 豆天皇 〇文武天皇授賜而並坐而此天下 子治賜 比諸

賜 政是者 閔母 威 近江大津宮御宇大倭根子天皇 乃〇近江

御宇大倭根子天皇 與天地共長與日月共遠不改常典 止 立賜

比 數賜 留法乎 禮法ヲイフナリ 受被賜坐而行賜事 止 衆受

被賜而忍 美仕奉 又止 羅 詔命 衆聞宣 如是仕奉侍 尔 去年十

一月 尔 威加 我王 朕子 天皇 乃 〇文武天皇 詔 久 羅 朕 御身 勞坐 故

暇間得而御病欲治此 乃 天皇 日嗣之位者 大命 尔 坐 世 大坐 坐

而治可賜 止 讓賜命 子 受被賜坐而答曰 久 羅 朕 者 〇文武天皇

即元明天 不堪 止 辞白而受不坐在間 尔 過多 久 日重而讓賜 倍

皇位繼承書

勞美威天今年六月十五日不詔命者受賜止白余賀此重位不
 繼坐事乎奈天地心乎勞美重美畏坐左久詔命眾聞宜故是以是
 親王始而王臣百官人等乃淨明心以而彌務不彌結不阿奈奈
 比奉輔佐奉年事不依而志此食國天下之政事者平長將在止
 所念坐又天地之共長遠不改常典止立賜前食國法母〇即
 禮法ヲ傾事無久動事无久渡將去母止奈所念行止久詔命眾聞
 宣云云

聖武天皇紀 神龜元年二月甲午受禪即位於大極殿〇元正
 詔ヲ受テ聖武天皇云云詔曰云云靈龜元年不此乃天日嗣高
 御座之業食國天下之政乎朕不朕トハ元正天皇ニシ
 皇ニ位ヲ讓リシ投賜讓賜而教賜詔賜都良非良淡海大津宮
 御宇倭根子天皇乃〇天智天萬世不改常典止立賜敷賜滿
 隨法〇即位ノ禮後遂者我子不爾〇聖武天佐太加余牟俱佐加

余無過事授賜止負賦詔賜比志依今〇賜〇行念詔訓解
 坐間不去年九月天地大勝物頭來理云六皇朕賀御世常顯
 見苗物不者不在今將嗣坐御世名乎記而云云今神龜二字御
 世乃年名止定立改養老八年為神龜元年而天日嗣高御座食
 國天下之業乎吾子美麻斯王不〇聖武天皇ハ皇太子ナ授賜
 讓賜止詔天皇〇元正大命乎頂受賜恐美持而云云元明
 詔ハ淡海大津宮御宇倭根子天皇ノ萬世ニ改テ常典ト立
 禮テハル法ニ讓テ行云云トアル一天智天皇ノ建テタル法ニ
 〇元正天皇〇靈龜元年九月三日踐祚靈龜八年ハ神加卿
 元正天皇紀首日本根子高瑞淨足姬天皇〇元正天皇云云九
 月〇靈龜元年庚辰受禪即位於大極殿詔曰朕欽承禪命不敢
 推讓履祚登極欲保社稷云云
 神皇正統記中卷 元正天皇云云乙卯靈龜乃西月ノ孫政

朔即天皇位於大極殿改元寶龜詔曰云

○桓武天皇 天應元年四月三日即位

光仁天皇紀 天應元年四月云 辛卯詔 〇光仁天皇云 天皇

我神命 良麻呂 詔大命乎 衆聞食止 宜朕以寡薄寶位 受賜

苦都身體不安 復年 彌高成 爾 餘命不幾 今所念 久此位 波

避天 〇光仁天皇 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

皇太子 止 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

是日皇太子 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

皇弟早良親王 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

親王 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

更王 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

即大皇太子 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇

民衆聞食止 宣 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
極殿詔曰明神 止 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
臣百官人等天下公民衆聞食宣掛畏現神坐倭根子天皇我皇
此天日嗣高座之業 掛畏近江大津乃宮 爾御宇之天皇乃初
賜比定賜流法隨 爾被賜 仕奉止 仰勸比 授賜 爾 爾 爾 爾
恐 美 受賜 利 懼進 母 不知 爾 退 母 不知 爾 恐 美 坐 久 宣 云 〇 此
八桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
帝王編年記卷十 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
受禪同廿五日 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
〇平城天皇 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
平城天皇紀 大同元年五月十八日即位 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇 〇天 〇桓武天皇
帝王編年記卷十二 平城天皇云 大同元年丙戌五月十八
日即位于大極殿御年卅三

○嵯峨天皇 大同四年四月一日踐祚

帝王編年記卷十二 嵯峨天皇云云大同四年巳丑四月一日

受禪同十三日戊子即位大極殿御年廿四

○淳和天皇 弘仁十四年四月十七日踐祚

帝王編年記卷十三 淳和天皇云云弘仁十四年癸卯四月十

六日〇十六日ハ誤ナリ庚子受禪同廿八日辛亥即位于大極

殿年三十八

皇年代略記上卷 淳和天皇云云弘仁十四年卯四月十七日

庚子受禪世八十九日自東宮遷内裏云云同廿八日辛即位大

殿

○仁明天皇 天長十年二月廿八日踐祚

仁明天皇紀 天長十年二月戊午朔乙酉皇帝皇〇淳和天於淳

和院讓位于皇太子〇仁明天詔曰云云戊子朔云云僧綱以下

高僧數十人來會闕庭奉賀踐祚〇コハニ踐祚トハ此ノ

也ニハアラ云云辛卯天皇御大極殿奉幣伊勢大神宮為應即立

也也壬辰頒遣中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣愛發云云於

柏原長岡二山陵豫告可即位之狀曰天皇云云癸巳天皇即位

於大極殿詔曰云云掛畏支倭根子天皇我宣此天日嗣高坐之

業手掛畏支近江大津乃宮御字之天皇乃初賜比定賜部法

隨尔仁奉止仰賜比授賜布大命乎受賜利恐美受賜利進母不

知尔退毛不知尔恐美坐止久宜布大勅乎衆聞食止宜云云明〇仁

皇ノ即位ハ禮ヲ行ヒシ

帝王編年記卷十三 仁明天皇云云天長十年癸巳二月廿八

日乙酉受禪三月癸巳即位於大極殿御年卅四

皇年代略記上卷 仁明天皇云云天長十年癸二月廿八日乙

受禪世同世日立恒貞親王為皇太子九同三月六日巳即位

皇位繼承篇

○文德天皇 嘉祥三年三月廿一日踐祚

文德天皇紀 嘉祥三年夏四月云云 甲子帝即位於大極殿

德天皇獨天智天皇ノ故事ニ做テ事ハ卷ニ皇太子皇位ヲ合

觀スベテ後仍天皇ト稱セザリシ事ノ條、載セタリ、宜シク合

帝王編年記卷十三 文德天皇云云 嘉祥三年庚午三月廿一

日己亥踐祚、四月十六日即位於大極殿御年二十四ハ非ナリ

當ニ十七日 皇平代略記上卷 文德天皇云云 嘉祥三年三月廿一日受

禪 是日先帝崩、廿日天下亮陰同四月十七日 甲即位 廿四、大

○清和天皇 天安二年八月廿七日踐祚

清和天皇紀 天安二年十一月七日即位

清和天皇紀 天安二年十一月戊午朔云云 七日甲子天皇即

位於大極殿時年九歲

帝王編年記卷十四 清和天皇云云 天安二年戊寅八月廿七

日乙卯受禪、同十一月七日甲子即位於大極殿時年九歲

○陽成天皇 貞觀十八年十一月九日踐祚

陽成天皇紀 元慶元年丁酉年春正月癸酉朔三日乙亥天皇

即位於豐樂殿 大極殿未作故 用豐樂殿云云

帝王編年記卷十四 陽成天皇云云 貞觀十八年丙申十一月

廿九日壬寅受禪、十九年丁酉正月三日乙亥即位豐樂殿御

年十

○光孝天皇 元慶八年二月廿三日踐祚

光孝天皇紀 元慶八年二月廿三日甲寅即位於大極殿、詔曰

帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

癸巳受禪、同廿三日甲寅即位於大極殿、御年五十五

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

癸巳受禪、同廿三日甲寅即位於大極殿、御年五十五

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

癸巳受禪、同廿三日甲寅即位於大極殿、御年五十五

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

癸巳受禪、同廿三日甲寅即位於大極殿、御年五十五

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

癸巳受禪、同廿三日甲寅即位於大極殿、御年五十五

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

癸巳受禪、同廿三日甲寅即位於大極殿、御年五十五

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

○帝王編年記卷十四 光孝天皇云云 元慶八年甲辰二月二日

皇位繼承編 卷之七

月二日天皇受禪トアルハ非ナリ、三代實錄ニ從テ二月四日ト為スベシ

○宇多天皇 仁和三年八月廿六日踐祚 同年十一月十七日即位

扶桑略記卷廿二 宇多天皇云云 仁和三年十一月十七日丙戌即位 辰一剗駕御鳳輦出東宮南行幸八省御小安殿二剗閑

白太政大臣參上、四剗出大極殿即于帝位

皇年代略記上卷 宇多天皇云云 仁和三年丁未八月廿六日辰

一剗立皇太子、酉一剗被奉劔璽、受禪 廿一 同十一月十七日丙戌即位

即位 大極殿 二十一日

○醍醐天皇 寬平九年七月三日踐祚 同年四月十三日即位

日本紀略 醍醐天皇云云 寬平九年七月十三日丙戌天皇即位於大極殿 春秋 十三

帝王編年記卷十五 醍醐天皇云云 寬平九年丁巳七月三日

丙子受禪同日元服 十三年 同十三日丙戌於大極殿即位

○朱雀天皇 延長八年九月廿二日踐祚 同年十一月一日即位

日本紀略 朱雀院云云 延長八年十一月一日天皇即位於大極殿

帝王編年記卷十五 朱雀院云云 延長八年庚寅九月廿二日

壬午受禪 八年 同年十一月廿一日庚辰於大極殿即位

○村上天皇 天慶九年四月廿八日即位 同年四月廿八日即位

日本紀略 村上天皇云云 天慶九年四月廿八日即位

帝王編年記卷十六 村上天皇云云 天慶九年丙午四月十三日受禪 同廿八日戊子於大極殿即位

ナリ、當ニ廿日ニ作ルマシ

○冷泉天皇 康保四年五月廿五日踐祚 同年十月十一日即位

日本紀略 冷泉院云云 康保四年十月十一日丙寅天皇於紫宸殿即位 依不豫不御大極殿

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

皇位繼承篇 卷之七

帝王編年記卷十六 冷泉院云云 康保四年丁卯五月廿五日
癸丑踐祚八年十月十一日丙寅於紫宸殿即位

○圓融天皇安和二年八月十三日踐祚

日本紀略 圓融院云云 安和二年九月廿三日丁卯天皇即位
於大極殿

帝王編年記卷十七 圓融院云云 安和二年己巳八月十三日
戊子受禪九月廿三日於大極殿即位十一歲

○花山天皇永觀二年八月廿七日踐祚

日本紀略 花山院云云 永觀二年十月十日丙戌天皇即位於
大極殿宣命如常

帝王編年記卷十七 華山院云云 永觀二年甲申八月廿七日
甲辰受禪同年十月十日丙戌即位大極殿御年十七

○一條天皇寬和二年六月廿三日踐祚

日本紀略 一條院云云 寬和二年七月廿二日戊子天皇即位
於大極殿

帝王編年記卷十七 一條院云云 寬和二年丙戌六月廿三日
庚申踐祚同七月廿二日戊子於大極殿即位七歲

○三條天皇寬弘八年六月十三日踐祚

日本紀略 三條院云云 寬弘八年十月十六日乙卯天皇即位
於大極殿

帝王編年記卷十七 三條院云云 寬弘八年甲辰六月十三日
乙卯受禪同年十月十六日乙卯即位於大極殿御年十六

○後一條天皇長和五年正月廿九日踐祚

日本紀略 後一條天皇云云 長和五年二月七日壬午天皇即
位於大極殿

帝王編年記卷十八 後一條院云云 長和五年丙辰正月廿九

日受禪二月七日即位于大極殿年九

○後朱雀天皇長元九年四月十七日踐祚

扶桑略記卷廿八後朱雀天皇云長元九年七月十日丙戌

即位大極殿

帝王編年記卷十八後朱雀院云長元九年丙子四月十七

日乙丑受禪同七月十日丙戌即位于大極殿御年廿八

○後冷泉天皇寬德二年正月十六日踐祚

扶桑略記卷廿九後冷泉天皇云寬德二年四月八日甲午

天皇即位於大極殿

帝王編年記卷十八後冷泉院云寬德二年乙酉正月十六

日癸酉受禪同四月八日即位于大極殿御年廿一

○後三條天皇治曆四年四月十九日踐祚

扶桑略記卷廿九後三條天皇云治曆四年七月廿一日辛

卯行幸太政官未二刻天皇即位官廳大極殿未造故也

帝王編年記卷十八後三條院云治曆四年戊申四月十九

日庚申踐祚同年七月廿一日辛卯即位于太政官廳大極殿未

成仍於此所有此儀御年卅五

○白河天皇延久四年十二月八日踐祚

扶桑略記卷三十白河天皇云延久四年十二月廿九日癸

卯即位大極殿

帝王編年記卷十九白河院云延久四年壬子十月十八日

壬辰受禪同廿九日癸卯即位于大極殿御歲廿○天皇ノ踐祚

略記ニ從テ十一月八日ト為スハ非ナリ扶桑

○堀河天皇應德三年十一月廿六日踐祚

扶桑略記卷三十今上皇帝云堀河天皇應德三年十二

月十九日辛卯天皇年始八歲即位於大極殿儀式如常

帝王編年記卷十九 堀河院云云應德三年丙寅十一月廿六日庚辰為皇太子即受禪同十二月十九日癸卯即位於大極殿

〇鳥羽天皇 嘉承二年七月十九日踐祚

皇代曆中卷 鳥羽天皇云云嘉承二年十二月一日於大極殿即位

帝王編年記卷十九 鳥羽院云云嘉承二年丁亥七月十九日

踐祚同十二月一日壬午於大極殿即位御年五

〇崇德天皇 保安四年正月廿八日踐祚

皇代曆中卷 崇德天皇云云保安四年二月十九日即位于大極殿

帝王編年記卷廿 崇德院云云保安四年癸丑正月廿八日午受禪二月十九日癸卯即位於大極殿

〇近衛天皇 永治元年十二月七日踐祚

皇代曆中卷 近衛天皇云云永治元年十二月廿七日即位于大極殿

帝王編年記卷廿 近衛院云云永治元年辛酉十二月七日辛未受禪廿七日辛卯即位於大極殿御年三歲

〇後白河天皇 久壽二年七月廿四日踐祚

皇代曆中卷 後白河天皇云云久壽二年十月廿六日御即位

帝王編年記卷廿一 後白河院云云久壽二年乙亥七月廿四日已巳踐祚

〇二條天皇 保元三年八月十一日踐祚

皇代曆中卷 二條天皇云云保元三年十二月廿日即位

○六條天皇 永萬元年六月廿五日踐祚
皇年代略記下卷 六條院云云永萬元年乙酉七月廿七日甲即

帝王編年記卷廿一 六條院云云永萬元年乙酉六月廿五日

壬寅為親王同日立太子即受禪七月廿七日甲戌即位於大極

○高倉天皇 仁安三年二月十九日踐祚
皇代曆下卷 高倉天皇云云仁安三年三月廿日即位

皇年代略記下卷 高倉院云云仁安三年三月廿日即位

○安德天皇 治承四年二月廿一日踐祚
皇代曆下卷 安德天皇云云治承四年四月廿二日即位於紫

宸殿

帝王編年記卷廿二 安德天皇云云治承四年庚子二月廿一

日癸卯受禪四月廿二日甲辰即位紫宸殿

○後鳥羽天皇 壽永二年八月廿日踐祚
皇年代略記下卷 後鳥羽院云云元曆元年甲辰七月廿八日甲

即位 大極殿本也 帝王編年記卷廿三 後鳥羽院云云壽永二年癸卯八月廿日

壬子立太子并受禪元曆元年甲辰七月廿八日即位於太政

官廳御年五後鳥羽天皇元曆元年七月廿八日 皇代曆下卷 土御門天皇云云建久九年三月三日即位

帝王編年記卷廿三 上御門院云云建久九年戊午正月十一

日巳酉受禪同三月三日庚子即位於太政官廳御歲四

順德天皇 承元四年十一月廿五日踐祚

皇代曆下卷 順德院云云承元四年十二月廿八日即位 太政官廳

帝王編年記卷廿三 順德院云云承元四年庚午十一月廿五日

日巳酉受禪同十二月廿八日壬午即位于太政官廳年十四

○仲恭天皇 承久三年四月廿日踐祚

皇代曆下卷 九條先帝云云承久三年四月廿日受禪 同

七月九日廢之未即位

帝王編年記卷廿四 後廢帝云云 〇淳仁天皇二對シテ仲恭

承久三年辛巳四月廿日甲戌受禪 年四 大嘗會不被行以前

退下世稱廢帝

○後堀河天皇 承久三年七月九日踐祚

皇代曆下卷 後堀河天皇云云承久三年十二月一日即位於

太政官廳

帝王編年記卷廿四 後堀河院云云承久三年辛巳七月九日

辛卯踐祚同年十二月一日庚辰即位于太政官廳御年十歲

○四條天皇 貞永元年十月四日踐祚

皇代曆下卷 四條天皇云云貞永元年十二月五日即位太政

官廳

帝王編年記卷廿四 四條院云云貞永元年壬辰十月十四日

庚辰受禪同年十二月五日庚辰即位二歲 〇天皇ノ踐祚ヲ貞

ト為スハ非ナリ百練鈔ニ

○後嵯峨天皇 仁治三年正月廿日踐祚

皇代曆下卷 後嵯峨天皇云云仁治三年三月十八日御即位

太政官廳

帝王編年記卷廿五 後嵯峨院云云仁治三年壬寅正月廿日

於萬里小路第 三條坊門南 踐祚云云三月十八日於太政官廳

即位御年廿三

○後深草天皇寬元四年正月廿九日踐祚

皇代曆下卷 後深草天皇云寬元四年三月十一日即位

政官廳

帝王編年記卷廿五 後深草院云寬元四年正月廿九日

已未受禪三月十一日庚子於太政官廳即位御年四歲

○龜山天皇正元元年十一月廿六日踐祚

皇代曆下卷 龜山天皇云正元元年十二月廿八日即位

太政官廳

帝王編年記卷廿六 龜山院云正元元年十一月廿六日踐

祚十二月廿八日即位于太政官廳御歲十一

○後宇多天皇文永十一年正月廿六日踐祚

皇代曆下卷 後宇多天皇云文永十一年三月廿六日即位

官廳

帝王編年記卷廿六 後宇多院云文永十一年甲戌正月廿

六日踐祚三月廿六日癸卯即位御歲八

○伏見天皇弘安十年十月廿一日踐祚

皇代曆下卷 伏見天皇云弘安十一年正月十五日即位

日即位太政官廳

帝王編年記卷廿六 伏見院云弘安十年丁亥十月廿一日

踐祚三月十五日天皇於太政官廳即位御歲廿

四

○後伏見天皇永仁六年七月廿二日踐祚

皇代曆下卷 後伏見天皇云永仁六年十月十三日即位

政官廳

帝王編年記卷廿六 後伏見院云永仁六年戊戌七月廿二

日受禪十月十三日即位太政官廳御年十一

○後二條天皇 正安三年正月廿一日踐祚

皇代曆下卷 後二條天皇云云正安三年三月廿四日即位官

廳 皇代記下卷 當今皇○後二條天皇云云正安三年正月廿一日受

禪 皇代曆下卷 後二條天皇云云正安三年正月廿一日受

○花園天皇 延慶元年八月廿六日踐祚

皇代曆下卷 花園天皇云云德治三年八月十一

月十六日即位太政官廳 皇代記下卷 今上皇○花園天皇云云德治三年八月廿六日踐祚

十一月十六日即位官廳 ○後醍醐天皇 文保二年二月廿六日踐祚

皇代曆下卷 先帝皇○後醍醐天皇 文保二年三月廿九日即位太

政官廳 皇代記下卷 後醍醐院云云文保二年二月廿六日受禪三月

廿九日即位官廳 ○後村上天皇 延元四年八月十五日踐祚

政官廳

皇代記下卷 後醍醐院云云文保二年二月廿六日受禪三月

廿九日即位官廳 ○後村上天皇 延元四年八月十五日踐祚

南方紀傳上卷 南朝廷元四年已卯北朝房應乙年ト為云

云冬十月五日新帝 皇○後村上天皇 御即位

太平記卷廿一 同十月三日 〇延元四年十月十日太神宮へ奉幣使

ヲ下サレ第七宮 〇義良親王ニテ即位ニ即セ給フ云云代々

儲君御位ヲ天ニ繼ガセ給フ時ノ例ナレバ三載數度ノ大禮

一ツモ欠ケテハ有ベカラストイヘドモ洛外山中ノ皇居ノ

事可周備ニアラザレバ如形三種ノ神器ヲ拜セラレクル計

ニテ新帝位ニ即カセ給フ 〇太平記ニ十月三日奉幣使ヲ太

以テ即位センコトヲ告グルナリ 〇天皇十月

○後龜山天皇 正平廿三年四月廿九日踐祚

南朝公卿補任 文中二年癸北朝應安六年十一月一日於吉

野行宮破行即位禮

○光嚴天皇 元弘元年九月廿二日踐祚

皇代替下卷 太上天皇 光嚴天皇 元弘二年三月廿二日

御即位官廳

皇年代略記下卷 光嚴院云云元弘元年辛未九月廿日已踐祚

十九被下太上天皇詔命于云云元弘二年正慶三月廿二日卯即位

○光明天皇 延元元年建武二年八月十五日踐祚

皇代替下卷 光明院云云建武四年十二月廿八日御即位

皇十八

皇年代略記下卷 光明院云云建武三年丙子八月十五日踐

祿云四年九月二日遷幸土御門東洞院御所十二月廿八日

甲午即位 政官廳

○崇光天皇 正平三年四月廿一日踐祚

皇代替下卷 崇光院云云貞和五年十二月廿六日即位官廳

皇年代略記下卷 崇光院貞和四年戊子十月廿七日踐祚

○後光嚴天皇 正平七年八月廿七日踐祚

皇代替下卷 後光嚴院云云文和二年十二月廿七日即位

皇代記下卷 當今 皇 後光嚴院云云觀應三年八月十七日踐

祿 今 文和元年 文和二年二月廿七日御即位

位 後圓融大皇 建德二年三月廿二日踐祚

皇代替下卷 後圓融院云云應安七年十二月廿八日御即位

皇代替下卷 後圓融院云云應安七年十二月廿八日御即位

皇年代略記下卷 後圓融院 云應安四年三月廿三日父

帝後光先退本宮幸忠光卿室原柳原亭被行親王冠禮并讓國

之儀十安城遷御之後於城外里內同七年十二月廿八日巳即

位上七政官廳云後小松院 云永德二年十二月廿八日即位

皇代曆下卷 後小松院 云永德二年十二月廿八日即位官

皇年代略記下卷 後小松院 云永德二年四月十一日受禪

六今日先立王 十二月廿八日寅即位太政

子不立親王應永十九年八月廿九日即位踐祚

○稱光天皇 同止一年十二月十九日即位

皇代曆下卷 稱光天皇 云應永十九年八月廿九日受禪同

二十一年十一月十九日即位下

皇年代略記下卷 稱光院 云應永十九年八月廿九日受禪

二十同廿一年十二月十九日即位太政

○後花園天皇 正長元年七月廿八日踐祚

皇代曆下卷 後花園院 云永享元年十二月廿七日即位

皇年代略記下卷 後花園院 云正長元年七月廿八日踐祚

云永享元年十二月廿七日巳即位太政

○後土御門天皇 同六年七月十九日踐祚

皇代曆下卷 今上天皇後土御門寬正六年十二月廿七日即位

皇年代略記下卷 後土御門院 云寬正五年七月十五日受

禪批同六年十二月廿七日即位八非十九日受禪トアル

トスベシ日

○後拍原天皇 明應九年十月廿五日踐祚

皇年代略記下卷 今上天皇後拍原天永正十八年八即大永

元ナ年三月廿二日即位紫殿宸

皇立繼統編 卷之七

皇胤紹運錄 後柏原院云云明應九年十月廿五日踐祚云云

永正十八年三月廿二日即位於南殿五十八

○後奈良天皇 大永六年四月廿九日踐祚 天文五年二月廿六日即位

皇年代略記下卷 後奈良院云云天文五年二月廿六日即位

皇胤紹運錄 後奈良院云云大永六年四月廿九日踐祚云云

天文五年二月廿六日即位

○正親町天皇 弘治三年十月廿七日踐祚 永祿三年正月廿七日即位

皇年代略記下卷 正親町院云云永祿三年正月廿七日即位

皇胤紹運錄 正親町院云云弘治三年十月廿七日踐祚永祿

三年正月廿七日即位

○後陽成天皇 天正十四年十一月七日踐祚 同年同月廿五日即位

皇年代略記下卷 後陽成院云云天正十四年十一月廿五日

即位

皇胤紹運錄 後陽成院云云天正十四年十一月七日受禪同

月廿五日即位

○後水尾天皇 慶長十六年三月廿七日踐祚 同年四月十三日即位

公卿補任 當院皇ヲイフ去年三月廿七日受禪四月十二

日即位十六年ヲイハレリ

續皇胤紹運錄 後水尾院云云慶長十六年三月廿七日受禪

十六 同年四月十二日即位

○明正天皇 寬永六年十一月八日踐祚 同七年九月十二日即位

公卿補任 當今皇ヲイフ寬永七年九月十二日即位

續皇胤紹運錄 明正院云云寬永六年十一月八日受禪同七

年九月十二日即位八歲

○後光明天皇 寬永廿年十月三日踐祚 同年十一月廿一日即位

公卿補任 後光明院云云寬永廿年十一月廿一日御即位紫

宸殿

續皇年代略記 後光明天皇云寬永廿年十月三日受禪今日先自仙洞渡御于内裏十一月廿一日即位

○後西院天皇 承應三年十一月廿八日即位 明應二年正月廿三日即位

公卿補任 新院 皇 〇後西院天皇 明曆二年正月廿三日御即位

續皇年代略記 後西院天皇云承應三年甲午十一月廿八日踐祚 十八 同日渡劔璽於花町殿云明曆二 丙申正月廿三日即位

位 二十 〇靈元天皇 寬文三年正月廿六日踐祚

續皇胤紹運錄 靈元院云寬文三年四月廿七日即位

續皇年代略記 靈元天皇云寬文三年正月廿六日受禪 同日劔璽渡御同廿七日內侍所渡御云同四月廿七日御即位

〇東山天皇 貞享四年三月廿一日踐祚 同年四月廿八日即位

續皇胤紹運錄 東山院云貞享四年四月廿八日即位 續皇年代略記 東山天皇云貞享四年三月廿一日受禪 同日劔璽渡御四月廿八日即位 十三

〇中御門天皇 寶永六年六月廿一日踐祚 同七年十一月十一日即位

續皇胤紹運錄 中御門院云寶永七年十一月十一日即位

續皇年代略記 中御門天皇云寶永六年六月廿一日御受禪云寶永七年十一月十一日御即位

〇櫻町天皇 享保廿年三月廿一日踐祚 同年十一月三日即位

續皇胤紹運錄 櫻町院云享保廿年十一月三日即位 十六

續皇年代略記 櫻町天皇云享保廿年三月廿一日御受禪云十一月三日御即位

〇續皇胤紹運錄 櫻町院云享保廿年十一月三日即位 十六

續皇年代略記 櫻町天皇云享保廿年三月廿一日御受禪云十一月三日御即位

續皇胤紹運錄 櫻町院云享保廿年十一月三日即位 十六

○桃園天皇 延享四年五月二日即位

續皇胤紹運錄 桃園院云云 延享四年九月廿一日即位

續皇年代略記 桃園天皇云云 延享四年五月二日即位

○櫻町天 遷幸櫻町殿是即為 今日被行讓位節會於洞中同未

刺劍壘渡御是亦自櫻町殿所以渡禁中也即日御受禪于時云

云九月廿一日即位 大義始午刻許

○後櫻町天皇 寶曆十二年七月廿七日即位

續皇胤紹運錄 後櫻町院云云 寶曆十三年十一月廿七日即位

續皇年代略記 太上天皇 〇後櫻町天 寶曆十二年七月廿七

日御踐祚云云 十三年十一月廿七日御即位 廿四

○後桃園天皇 明和七年十一月廿八日即位

續皇胤紹運錄 後桃園院云云 明和八年四月廿八日即位

續皇年代略記 後桃園天皇云云 明和七年十一月廿四日御

受禪八年四月廿八日御即位

○光格天皇 安永八年十一月廿五日即位

皇統御譜 光格天皇云云 安永九年十二月四日御即位 十歲

續皇胤紹運錄 今上皇帝 〇光格天 安永八年十一月八日為

御養子可有踐祚旨 獻慮御治定云云 同月廿五日踐祚同九年

十二月四日即位

○仁孝天皇 文化十四年三月廿二日即位

皇統御譜 今上皇帝 〇仁孝天 文化十四年九月廿一日御即

位 十三朝紀聞卷六 光格天皇云云 文化十四年三月廿二日帝

讓位於皇太子 〇皇太子八惠仁親王

同書卷七 仁孝天皇云云 文化十四年九月二十一日行即位

禮

○孝明天皇弘化三年二月十三日踐祚

皇統御譜 今上天皇孝明天皇弘化四年九月廿三日御即位

今日鈔卷一 今上天皇孝明天皇云云弘化三年二月十三日

登祚云云弘化四年云云九月二十三日行即位禮

○今上慶應三年正月九日踐祚

帝王御譜 今上天皇云云明治元年八月廿七日御即位

公布類聚第四篇儀式 明治一年八月廿七日天皇御即位

大禮被為行

○空位

空位トハ天皇崩ス時ニ皇位ヲ繼承スル者無シ、
而シテ後更ニ立ツ者アリテ皇位ヲ繼承ス、其ノ
間數日ヲ經ルアリ歲月ヲ經ルアリ、並ニ皆コレ

ノ空位一為ス、飯豊青皇女ノ如キ暫、萬機ノ聽ク
トイヘドモ、而レドモ皇位ヲ繼承セシニ非ス、故
ニ皇女ノ萬機ヲ判決セシノ間モ亦以テ空位ト
為ス

仁德天皇紀首條 譽田天皇〇應神天皇崩時太子兒道稚郎子讓

位于大鷦鷯尊〇仁德天皇未即帝位、仍詔大鷦鷯尊云云大鷦鷯

尊對言、先皇謂皇位者一日之不可空、故預選明德云云、猶由讓

位於大鷦鷯尊以久不即皇位、爰皇位空之既經三載云云

頭宗天皇紀首條 五年〇清寧天皇春正月白髮天皇

崩、是月皇太子億計王〇仁賢天皇與天皇讓位久而不處、由是天

皇妣飯豊青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政、自稱忍海飯豊青尊、

當世詞人歌曰、野麻登陸、備瀨我保、指母能婆於尸、農瀨能莒能

挖、哥紀備屢都奴婆之能瀨野、冬十一月飯豊青尊崩、葬葛城垣

神武天皇紀辛酉年春正月庚辰朔天皇即位於橿原宮是歲為天皇元年

七十有六年春三月甲午朔甲辰○十一日天皇崩于楳原宮

○空位三年九月廿六日從神武天皇七十六年三月十二日比肩至綏靖天皇元年正月七日

綏靖天皇紀元年春正月壬申朔己卯○八日神濤名川耳尊○綏靖天皇即位

三十三年夏五月天皇不豫癸酉○十日崩

○空位一月廿一日從綏靖天皇三十三年五月十一日至同年七月二日安寧天皇紀○三十三年夏五月神濤名川耳天皇即位

安寧天皇紀○三十三年夏五月神濤名川耳天皇即位其年七月癸亥朔乙丑○三日皇太子即天皇位

三十八年冬十二月庚戌朔乙卯○六日天皇崩

○空位一月廿七日從安寧天皇三十八年十二月三日至懿德天皇元年二月七日懿德天皇紀元年春二月己酉朔壬子○四日皇太子即天皇位

三十四年秋九月甲子朔辛未○八日天皇崩

○空位一年三月三十日從懿德天皇三十四年九月九日至孝昭天皇元年正月八日孝昭天皇紀元年春正月丙戌朔甲子○九日皇太子即天皇位

八十三年秋八月丁巳朔辛酉○五日天皇崩

○空位四月三十一日從孝昭天皇八十三年八月六日至孝安天皇元年正月九日孝安天皇紀元年正月九日○九日皇太子即天皇位

孝安天皇紀元年春正月乙酉朔辛卯○七日皇太子即
天皇位

百二年春正月戊戌朔丙午○九日大皇崩

○空位十一月三十一日從孝安天皇百二年正月十日

孝靈天皇元年正月十二日繼承皇位

孝靈天皇紀元年春正月壬辰朔癸卯○十二日皇太子
即天皇位

七十六年春二月丙午朔癸丑○八日天皇崩

○空位十月三十五日從孝靈天皇七十六年正月九日

孝元天皇元年正月十四日繼承皇位

孝元天皇紀元年春正月辛未朔甲申○十四日皇太子
即天皇位

五十七年秋九月壬申朔癸酉○二日天皇崩

○空位一月二十九日從孝元大皇五十七年九月三日

開化天皇元年四月九日崩

開化天皇紀條首五十七年○孝元天皇元年十一月十一日繼承皇位

朔壬午○十二日皇太子即天皇位

六十年夏四月丙辰朔甲子○九日天皇崩

○空位八月三十二日從開化天皇六十年四月十日

崇神天皇元年十二月五日崩

崇神天皇紀元年春正月壬申朔甲午○十三日皇太子
即天皇位

六十八年十二月戊申朔壬子○五日崩

○空位廿五日從崇神天皇六十八年正月一日

無仁天皇元年正月二日繼承皇位

無仁天皇紀元年春正月丁丑朔戊寅○二日皇太子即

天皇位

九十九年秋七月乙巳朔戊午○十四日天皇崩

○空位十二月廿六日從垂仁天皇九年七月十五日景行天皇元景行天皇紀元年秋七月己巳朔己卯○十一日皇太子

景行天皇元景行天皇紀元年秋七月己巳朔己卯○十一日皇太子

即天皇位

六十年冬十一月乙酉朔辛卯○七日天皇崩於高穴穗

宮

○空位一月廿六日從景行天皇六十年十一月八日成務天皇元成務天皇紀元年春正月甲申朔戊子○五日皇太子即

成務天皇元成務天皇紀元年春正月甲申朔戊子○五日皇太子即

位

六十年夏六月己巳朔己卯○十一日天皇崩

○空位六月廿九日從成務天皇六十年六月十二日仲哀天皇元仲哀天皇紀元年正月十日

應神天皇元應神天皇紀元年二月六日在母后之胎中繼承皇位

○應神天皇元應神天皇紀元年二月六日在母后之胎中繼承皇位

子ノ皇位ヲ繼承セシ事ノ條及上文既稱異例ニ條ニ

一贊セズ

應神天皇紀四十二年二月甲午朔戊申○十五日崩于

豐明宮

○空位二年十月十七日從應神天皇四十二年正月十六日仁德天皇元仁德天皇紀元年正月十六日

仁德天皇元仁德天皇紀元年正月十六日

即天皇位

八十七年春正月戊子朔癸卯○十六日天皇崩

○空位十三月十三日從仁德天皇八十七年正月十七日

皇位繼承

卷之七

履仲天皇 元年二月十一日 繼承皇位

履仲天皇紀 元年春二月壬午朔皇太子即位於磐余稚

櫻宮

六年三月壬午朔丙申 〇十五日 天皇玉體不愈水土不

調崩于稚櫻宮

〇空位 九月十五日 從履仲天皇 六年三月十六日

久正天皇 元年正月二日 繼承皇位 元年正月一日

及正天皇紀 元年春正月丁丑朔戊寅 〇二日 儲君即天

皇位

五年春正月甲申朔丙午 〇廿三日 天皇崩于正寢

〇空位 一年廿四月若干日 從及正天皇 五年正月廿四日

〇朕辭斷 〇承皇位 元年十二月十四日

允恭天皇 元年十二月十四日 繼承皇位

允恭天皇紀 元年冬十有二月云云乃即帝位

四十二年春正月乙亥朔戊子 〇十四日 天皇崩

〇空位 十一月廿八日 從允恭天皇 四年正月十五日

安康天皇 元年八月九日 崩 安康天皇紀 元年春正月天皇崩 〇九日 天皇云

安康天皇紀 元年春正月天皇崩 〇九日 天皇云

云十二月己巳朔壬午 〇十四日 次德皇子 〇安天即

天皇位

三年秋八月甲申朔壬辰 〇九日 天皇為眉輪王見弑

〇空位 二月二十二日 從安康天皇 三年八月十日

雄略天皇 元年八月七日 崩 雄略天皇紀 元年十一月壬子朔甲子 〇

雄略天皇紀 元年十一月壬子朔甲子 〇

廿三日 天皇命有司設壇於泊瀨朝倉即天皇位

廿三年八月庚午朔丙子 〇七日 天皇云云崩大殿

○空位四月三十日 從雄略天皇元三年八月八日
清寧天皇元五年正月十五日 繼承皇位
清寧天皇紀元春正月戊戌朔壬子 命有司

設壇場於磐余甕粟陟天皇位
五年春正月甲戌朔己丑 天皇崩于宮

○空位十一月十四日 從清寧天皇元五年正月十七日
頭宗天皇元三年四月廿五日 繼承皇位

頭宗天皇紀元春正月己巳朔云云乃召公卿百僚於
近飛鳥八鉤宮即天皇位
三年夏四月丙辰朔云云庚辰 二當ル 天皇崩于八鉤

宮
○空位八月八日 從頭宗天皇元三年四月廿六日
仁賢天皇元一年正月五日 繼承皇位

仁賢天皇紀元春正月辛巳朔乙酉 皇太子於

石上廣高宮即天皇位

○空位三月若干日 從仁賢天皇元一年八月九日
武烈天皇元八年十二月八日 繼承皇位

武烈天皇紀元春十一月 仁賢天皇元十二年 於是
太子命有司設壇場於泊瀨列城陟天皇位

八年冬十二月壬辰朔己亥 天皇崩于列城宮

○空位一月廿四日 從武烈天皇元八年十二月九日
繼體天皇元五年二月四日 繼承皇位

安閑天皇元二年二月廿七日 繼承皇位

安閑天皇紀元春二月辛丑朔
丁未 男大迹天皇立大兄 安閑天皇元一年二月廿七日 繼承皇位

敏達天皇 元年四月三日繼承皇位

敏達天皇紀元年夏四月壬申朔甲戌 〇三日皇太子即天皇位

天皇位

十四年秋八月乙酉朔己亥 〇十五日天皇病彌留崩于大殿

〇空位十八日 從敏達天皇十四年八月十六日

用明天皇 敏達天皇十四年九月四日 繼承皇位

用明天皇紀首十四年 〇敏達天皇ノ九月甲寅朔戊午

〇五日 天皇即天皇位

二年四月乙巳朔 〇九月 天皇崩于大殿

〇空位三月廿一日 從用明天皇二年四月十日

崇峻天皇 用明天皇二年八月二日 繼承皇位
崇峻天皇紀二年 〇用明天皇八月癸卯朔甲辰 〇二

次屋姬尊與群臣勸進天皇即天皇位

五年十一月癸卯朔乙巳 〇三日馬子宿禰詠於群臣

〇空位三十日 從崇峻天皇五年十一月四日

推古天皇 崇峻天皇五年十二月八日 繼承皇位

推古天皇紀首五年 〇崇峻天皇十二月壬申朔己卯 〇

日 皇后即天皇位於豐浦宮

三十六年三月丁未朔 〇七月 天皇崩

〇空位九月廿六日 從推古天皇三十六年三月八日

舒明天皇 舒明天皇紀元年春正月癸卯朔丙午 〇四日 云即日

即天皇位

十二年冬十月己丑朔丁酉 〇九日 天皇崩于百濟宮

○空位二月三十四日 從舒明天皇十三年十月十日
皇極天皇元年正月十五日 至皇極天皇元年正月十四日

孝德天皇 孝德天皇 甲寅年六月十四日 受禪 皇極天皇四年八月

孝德天皇紀五年 歲〇甲寅十月十四日 崩 皇極天皇四年八月

當 天皇崩于正寢

○空位二月廿二日 從孝德天皇後五年十月十一日
齊明天皇元年正月三日 至齊明天皇元年正月二日

齊明天皇 齊明天皇 乙未年正月三日 崩 齊明天皇元年正月二日

齊明天皇紀元年春正月 壬申朔甲戌 〇三日 皇祖母尊

即天皇位於飛鳥板蓋宮

七年秋七月甲子朔丁巳 〇廿四日 天皇崩

○空位有無不詳

天智天皇 齊明天皇 乙未年七月三日 崩 齊明天皇元年七月三日

天智天皇紀 齊明天皇 乙未年七月三日 崩 齊明天皇元年七月三日

皇太子素服納制 〇此ニ捺制トアリ

十年十二月癸亥朔乙丑 〇三日 天皇崩于近江宮

○空位一日 天智天皇十年十二月五日 繼承皇位

弘文天皇 弘文天皇 乙未年七月三日 崩 弘文天皇元年七月三日

天武天皇 天武天皇 乙未年九月九日 崩 天武天皇元年九月九日

持統天皇 持統天皇 乙未年八月九日 崩 持統天皇元年八月九日

文武天皇 文武天皇 乙未年十一月八日 崩 文武天皇元年十一月八日

元明天皇 元明天皇 乙未年六月十五日 崩 元明天皇元年六月十五日

元正天皇 元正天皇 乙未年九月三日 崩 元正天皇元年九月三日

聖武天皇 聖武天皇 乙未年二月四日 崩 聖武天皇元年二月四日

孝謙天皇 孝謙天皇 乙未年七月二日 崩 孝謙天皇元年七月二日

淳仁天皇 淳仁天皇 乙未年八月二日 崩 淳仁天皇元年八月二日

稱徳天皇 稱徳天皇 乙未年八月九日 崩 稱徳天皇元年八月九日

村上天皇	冷泉天皇	圓融天皇	花山天皇	一條天皇	三條天皇	後一條天皇	後朱雀天皇	後冷泉天皇	後三條天皇	白河天皇	堀河天皇	鳥羽天皇
康保四年五月廿五日	康保四年五月廿五日	安和二年八月廿三日	觀和二年八月廿七日	寬和二年六月廿三日	弘長二年六月廿三日	長元二年四月廿七日	長元二年四月廿七日	治曆二年四月廿九日	延久四年四月廿八日	應德三年十一月廿六日	應德三年十一月廿六日	嘉承二年七月廿九日
神護景雲四年八月廿三日	神護景雲四年八月廿三日	天曆二年八月廿三日	天曆二年八月廿七日	天曆二年六月廿三日	天曆二年六月廿三日	天曆二年四月廿七日	天曆二年四月廿七日	天曆二年四月廿九日	天曆二年四月廿八日	天曆二年十一月廿六日	天曆二年十一月廿六日	天曆二年七月廿九日
讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位
繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位

朱雀天皇	醍醐天皇	宇多天皇	光孝天皇	陽成天皇	清和天皇	文德天皇	仁明天皇	淳和天皇	嵯峨天皇	平城天皇	桓武天皇	光仁天皇
天曆八年九月廿二日	天曆九年七月廿二日	天曆九年七月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日
天曆八年九月廿二日	天曆九年七月廿二日	天曆九年七月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日	天曆八年八月廿二日
讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位	讓位
繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位	繼承皇位

延曆元廿五年七月

後村上天皇

正延元四年八月十五日受禪

鳩嶺雜事記

應安元年三月十一日崩

三月十一日住吉御所

崩御

御年四十一奉

細々要記卷六、應安二年南方正平二月南山ノ帝村[○]後

天皇ヲ御不豫夕リト云云、三月十一日南山ノ帝崩御

壽四十三ト云云、同十三日如意輪寺ニ葬リ奉ルト云

云、先帝後醍醐御遺勅ニヨツテ御在世ノ中御讓位ナ

クマタ御剃髮ナシト云云、四月廿九日皇太子熙成親

王[○]後龜山天受禪先帝ヲ後村上天皇ト追号シ奉ル

ナ[○]本書ニ應安二年トアルハ誤

○空位四十七日

從正平三年三月十二日

後龜山天皇

正平三年四月廿九日讓位

後小松天皇

應永九年閏十月廿九日讓位

稱光天皇

正長元年七月廿九日受禪

皇年代略記、稱光院云云、正長元年七月廿日卯刻於土

御門皇居黒戸崩未^選位

○空位七日

從正長元年七月廿一日

後花園天皇

正長元年七月廿八日讓位

後土御門天皇

明應九年九月廿八日崩

皇年代略記、土御門院云云、明應九年九月廿八日於黒

戸崩御

○空位廿五日

從明應九年九月廿九日

後拍原天皇

明應九年十月廿四日繼承皇位

皇年代略記、後拍原院云云、大永六年四月七日崩小御

所^三六十

○空位廿一日

從大永六年四月八日

後奈良天皇 大永六年四月廿九日繼承皇位

皇年代略記、後奈良院云云弘治三年九月五日崩、奉葬

於泉涌寺奉號後奈良院

○空位五十日 從弘治三年九月六日

正親町天皇 弘治三年十月廿六日繼承皇位

後陽成天皇 天正十四年十一月廿七日繼承皇位

後水尾天皇 慶長十六年三月廿七日繼承皇位

明正天皇 寬永六年十一月八日繼承皇位

後光明天皇 寬永六年十月三日繼承皇位

續皇年代略記、後光明天皇云云承應三年九月廿日崩

○空位一月三十六日 從承應三年九月廿一日

後西院天皇 承應三年十一月廿八日繼承皇位

靈元天皇 寬文三年正月廿六日受禪

東山大皇 貞享四年三月廿一日受禪

中御門天皇 寶永六年六月廿一日受禪

櫻町天皇 享保四年三月廿一日受禪

桃園天皇 延享四年五月廿一日受禪

續皇年代略記、桃園天皇云云寶曆十二年七月廿一日

崩御 皇居御寶算廿二

○空位五日 從寶曆十二年七月廿二日

後櫻町天皇 寶曆十二年七月廿七日繼承皇位

後桃園天皇 明和七年十一月廿四日受禪

續皇年代略記、後桃園天皇云云安永八年十一月九日

崩御 寶算廿二

○空位十五日 從安永八年十一月十日

光格天皇 安永八年十一月廿五日 繼承皇位

仁孝天皇 弘化三年二月六日 崩 父禪

皇統御譜 今上皇帝 弘化三年二月六日崩御

實正月廿六日 被為及御大切

被本御謚号 迄奉大行天皇

○空位 六日 從弘化三年二月七日

孝明天皇 慶應二年十二月廿五日 繼承皇位

官途必携卷七 戊辰年十一月廿九日 御布告 一先

帝 皇ヲイフ 御忌日 是迄御發喪日ヲ以テ 十二月廿九

日ト被為定置候處 今般御制度復古之折柄 第一御追

孝ノ思召ニテ 古禮ニ被為基 以來崩御御正忌之通 十

二月廿五日ニ被為定候旨 被仰出候事

○空位 十二日 從慶應二年十二月廿六日

今上 慶應三年正月九日 繼承皇位

皇位繼承篇卷七終

皇位繼承篇卷七終

皇位繼承篇卷七終

皇位繼承篇卷八

議官 福羽美靜 檢閱
少書記官 横山由清
大書記生 黒川真頼 編纂

讓位

讓位ハ天皇ノ所以アリテ皇位ヲ皇太子及皇子
皇女ニ傳フルヲイフ但シ諸王ニ傳ヘシ例ナシ上古神武天
皇ヨリ武烈天皇ニ至テ廿五代ハ讓位ノ事アル
コト無シ、繼體天皇皇位ヲ安閑天皇ニ讓テ即日
崩ス、コレヲ讓位ノ始トス、繼體天皇ヨリ以來此
儀アル者凡テ五十八帝ナリ、而シテ其讓位ノ事
故、疾病ニ因テ讓リシアリ、衰老ヲ以テ讓リシア
リ、皇太子ノ長ズルヲ俟テ讓リシアリ、災異ヲ以

丑朔天皇定策禁中禪天皇位於皇太子○天皇病ニ因テ位ヲ
一年六月ノ文武天皇位ヲ繼承スルコト○天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇ナリ文武天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ

○光仁天皇

光仁天皇紀 天應元年夏四月己丑朔左右兵庫兵器自鳴其
聲如以大石投地也遣散位從五位下多治比真人三上於伊勢
伯耆守從五位下大伴宿禰繼人於美濃兵部少輔從五位下藤
原朝臣管繼於越前以固關焉以天皇不豫也辛卯詔云天皇我
御命等良麻詔大命乎親王等王等臣等百官乃人等天下公民衆
聞食止宜朕以寡薄寶位乎受賜年久重嘉政頻闕天下
不得治成加以元來風病尔苦都身體不安復年毛彌高成尔餘
命不幾今所念久此位波避天暫間毛御體欲養毛所念須故
是以皇太子止定賜山部親王尔○桓武天下政波授賜布

○天皇病ニ因テ位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ
天皇位ヲ繼承スルコトハ珂瑞皇子ニ禪ルコトヲ

○平城天皇

平城天皇紀 大同四年夏四月丙子朔讀經宮中又遣使於京
下諸寺誦經天皇自從去春寢膳不安遂禪位於皇太弟○皇太
野親天皇十即詔曰現神等大八洲所知倭根子天皇我詔旨
止勅御命乎親王等王等臣等百官乃人等天下公民衆聞食
宜朕躬劣弱五洪業尔不耐已止本自思畏利賜止暫毛不息加
以朕躬元來風病尔苦都身體不安志經日累月五萬機欽憊
今所念久此位波避天一日片時毛御體欲養毛所念須故是
以皇太弟止定賜流其親王尔天下政波授賜布諸衆此狀乎悟
清真心乎毛此皇子乎輔導後天下百姓乎可令撫育止勅天皇
御命乎衆聞食止宜○詔元來風病尔苦都身體不安志經日累月五萬機欽憊

○嵯峨天皇

日本紀略日本逸史卷三十所引

嵯峨天皇云弘仁十四年夏四月甲

午帝遷冷泉院詔右大臣藤原朝臣冬嗣曰朕思傳位于皇太弟

○皇太弟八大伴親王矣今將果宿心故避官焉冬嗣言曰聖知

聖今陛下以萬機付託聖人天下幸甚但比年之間豐稔未復若

奉一帝二太上皇臣恐天下難堪臣願暫待年復然後傳位於事

不晚帝曰朕心素定又推賢讓位唯為天下賢君臨政何憂年之

未復乎云云庚子帝御前殿引今上皇○淳和天曰朕本諸公子也

始望不及於此太上天皇○平城天曲垂褒飾起登儲貳遂遜位

于朕躬辭不獲免日慎一日未幾而身嬰痲疾彌留不瘳為萬機

擁滯令右大臣藤原朝臣冬嗣奉還神璽朕始有歸閑之志太上

天皇不允所請當此之時有小人之言令太上皇與朕有隙公卿

相共議逐君側群少太上不察愚款有入東之計群臣不安社稷

遣邀之朕亦心有如暇日朕以冥昧在位十有六年太弟○淳和

與朕春秋亦同朕雖乏知人之鑒與太弟周施年久太弟之賢

明仁孝朕之所察仍欲傳位於太弟已經數年今果宿心宜知之

今上皇○淳和天避坐跪言臣云今上奉表曰臣聞云云帝不聽

詔曰現神登大八洲所知云云翌日今上朝于冷泉院重抗表陳

讓曰云云帝遂不許○詔身嬰痲疾彌留不瘳トヲルヲ以テ

○淳和天皇

仁明天皇紀條首天長十年春二月乙酉皇帝○淳和天於淳和

院讓位于皇太子○皇太子八正良親王詔曰現神止大八洲國

所知倭根子天皇我詔止良万勅御命乎親王諸臣百官乃人

等天下公民眾諸聞食止宜太上天皇○嵯峨天朕我不德乎不

棄賜天志寶位乎授賜理開忝鍾重滕五日日畏慎太麻春秋乃往隨

爾舊疾毛稍發故機務乃暫毛虧急乎許忍賜皇朝夕煩懷念
止久矣今念行久皇太子止定流太正良親王賢明夙彰仁孝
兼厚天久太能毛之久於太比之久在是以撫安國家之止此位
乎授賜布諸此狀乎悟天清直心知乎此皇子乎輔導文仕奉天
天下乎平久令有云是夕今上皇仁明抗表辭寶位曰臣
某言云拜表以聞後太上天皇○淳和天不聽丙辰今上重抗
表曰臣某言云重表陳請後太上天皇遂亦不許

○清和天皇

清和天皇紀 貞觀十八年十一月廿九日皇太子貞明親王ハ
天皇十リ自出東官駕牛車詣深殿院是日讓位於皇太子云
詔曰云朕以薄德天日嗣乎忝之賜倍日夜無間久慎畏利
御座須而君臨漸久年月改隨爾熱病頻發利御體疲弱之不
堪聽朝政云云是以此位乎脫履天御病乎治賜比國家乃災害

乎領女息此念行止年久奈利云故是以皇太子止定留貞
明親王此位乎授賜布諸眾此狀乎悟天清直心乎持天皇太
子乎輔導岐仕奉天下乎平久令有典○此ノ一章委シクハ
宜シク合親スバシ

○醍醐天皇

日本紀略 醍醐天皇云云延長八年八月廿五日右大臣方ラ定
於天台山令讀金剛般若經一百卷依祈御不豫也九月九日
無節會云云廿二日天皇逃位讓於皇太子寬明親王○寬明親
王ハ即朱
雀天皇云云廿七日先帝欲遷坐朱雀院之間御病甚重移坐右
近衛府大將曹司○因テ皇位ヲ讓シコト瞭然タリ

○冷泉天皇

榮花物語 月夜のけいとあまのけいとあまのけいとあまのけいと
冷泉天皇ノ物氣さるる殿上人とのけりたゆまじ

たる初方さふひひ終、いとけおをりくおはくますふ
 りおおまきせ終ふ何をおまきせ終ふとらふ、聞あくく
 十思へるふ、みうとくりあも終ふ一ひ平のどりかてむあ
 くとおまきせ終ふといふあうも、必あるをまきとらふ思へるふ
 あらうの安和二年と終ひあめるふ、位あう云と勢あをそひ
 かりせ終めれば、いつかあるべま終あまきとらふと終み兄
 元させ終へる云云もつた月日もそとてとらう終あう
 や、うかど皇ヲイフおまきせ終とらう終しる、安和二年八
 月十三日なま、みうとくおまきせ終めれば、東宮^〇守平親王
 天皇位ふつり勢終ぬ、序年十一あり
 神皇正統記中巻 第六十三代冷泉院云云此天皇邪氣
 おけいほりたれを、即位時大極殿ふ出終ふ事もとら
 まをりるまう、とまけるふや、紫宸殿ふて其禮あり云二年

けつりーき、藤園云云

圓融天皇

榮花物語^{山花} あはれわをま終ゆと^〇喪事ナド一さげれい
 みくくとも、いほひくせふ、せとを何うめと心けう
 おほりめり^〇圓融天皇ノ勉ノ^テ位ニ在ルヲイフ^カかるほどふ年號も
 うたりて永觀元年とらふ、正月よりまらめ事ども終つ
 あてま交もてゆく、其事と何るをまきとられ、まらあ
 月日も過めてゆくふ云う人皇^〇圓融^〇天^〇今^〇の^〇り^〇で^〇あり^〇ん
 せ終くおがさう、うちふ終りのけもおまらう志げう
 おらうせ終ふあも、冷泉院ハナ例終結心をくくるて
 おらうはくく終くまらせ終ふふ、はうかて永觀二年ふ
 終らぬ、とらうふう終らぬとおほりめりて人たれをさあ
 終らうふおがらめさるる^〇云^〇か^〇て^〇八月^〇ふ^〇あり^〇利

乙酉正月十日大赦天下依御藥也此日東宮〇東宮ハ親仁親王ニテ即後冷泉

天皇參觀十六日天皇讓位於皇太子親仁親王

祭花物語合根 うち皇〇後朱雀天皇 御少兒のらと 狩ありせ

後人バ、いふとむつのらと 御少兒のらと 狩ありせ

さぬ形と同一とあり、日ざり過るまふかほ水船と沃

せせ給アヤよつらんとせせ、その作法のほあつらひて

いふとまらる、いと寒き頃堪づいふ見えを勢給ふ云云 持

僧明快めして仰られらるハ、今々此母給祈里系せと、年頃

此預ひる都卒天皇内院あり、年ごろ給ねいふ遠へ 都

卒いふ 意いふ 人給いふ 仰られらるハ、明快の

いふとまらる、いと寒き頃堪づいふ見えを勢給ふ云云 持

僧明快めして仰られらるハ、今々此母給祈里系せと、年頃

此預ひる都卒天皇内院あり、年ごろ給ねいふ遠へ 都

〇後三條天皇

榮花物語右左 海らとみやらのあを八日〇延久四

ナリおとせ給ふ〇後三條天皇ニ讓ルヲイフ と給近〇那 那

て重くわづらひ給ふおとせ給ふ〇延久四年十二月

〇後三條天皇病ニ由テ皇位ヲ讓シコト榮花物語ニテ瞭然

タリ然ルニ續世繼卷四に於テ云ク萬事むら〇延久四年

更行え給ひて、山給河ら〇延久四年 萬事むら

あてを案を由過させ給ふ〇延久四年 萬事むら

あろやをくやお不〇延久四年 萬事むら

あるともかだつ〇延久四年 萬事むら

あひおほく今も〇延久四年 萬事むら

あひおほく今も〇延久四年 萬事むら

あひおほく今も〇延久四年 萬事むら

あひおほく今も〇延久四年 萬事むら

あひおほく今も〇延久四年 萬事むら

〇二條天皇

百練鈔卷七 二條天皇云永萬元年六月廿五日讓位於第

二親王順仁二歳 順仁親王ハ先雖可有立坊依主上御不豫

皇位繼承 卷之八

み知りきふよりりてなりけり、とぞ此二月后此宮の侍復ふ
 一此侍子〇秀仁親王ニテの下き給へまゝのたやうて太子
 小立せ給ひしをわ、例の人給口すが那さひ、か給承久の廢
 帝の坐れさせ給ふとひらけ坊ふ給へまゝ、いとあ用
 あましを那どりのあま、うへきおまゐるさせ給ひてその七日
 やうく尊歸あり、伊あやみ料おらゝゝ大のそ世も靜
 那らけ、とれ三年をりり天変あまゝり那ゐありなとて、
 〇とてあげくはつゝ〇あのみきやうあれば、いつおけ
 はさんとい心ともさわぐ〇〇〇後堀河天皇讓位ノコト
 一ツニハ災異ニモ因レ
リ、天皇災異ニ因テ皇位ヲ
 讓シ事ノ條見合スベシ

〇後醍醐天皇

神皇正統記下卷 大日本島根を中より皇都般室内傳ふ
 神靈も芳野みおけし海をバ、いつくこの都みりゝさふおら

さて八月〇延元四年乃十日のちり六日あや、秋霜ふお
 せれさせ給ひてかくれまゝぬとときとを、麻るう
 なるまが世、今ふはとをねなゝひとありぬれど、
 月お那るらゝりて老は涙もかさけへ給ふ、筆の
 さへとらほりぬ云云かおれた樹をもさやうりて先給ふあや
 前夜より親王〇義良親王ニテ即
 後村上天皇トリをバ左大臣給弟へ
 うつゝもらわらゝ、三種の神器を傳へしうら

細々要記卷三 曆應二年南方延元四年云云八月九日ヨリ

吉野ノ帝御不豫ト云云、同十六日ノ夜吉野ノ帝崩御壽五十
 二歳ト云云

太平記卷廿一 南朝年號延元三年八月九日ヨリ吉野主上
〇後醍醐天 御不豫ノ御事有ケルが次第ニ重ラセ給フ、醫王
 善逝ノ誓約モ祈ルニ其ノ驗ナク、耆婆扁鵲ガ靈藥モ施スニ

其驗オハシマサズ、玉體日々ニ消エテ晏駕ノ期遠カラジト見エ給ケレバ、大塔宮忠雲僧正御枕ニ近付奉テ泪ヲ押ヘテ申サレケルハ、神路山ノ花ニ夕ビ開ル春ヲ待石清水ノ流遂ニ澄ベキ時アラバ、サリトモ佛神三寶モ捨進セラレ、事ハヨモ候ハジトコソ存候ツルニ、御脉已ニ替セ給テ候由典藥頭驚申候ヘバ、今ハ偏ニ十善ノ天位ヲ捨テ、三明ノ覺路ニ趣カセ給フベキ御事ヲノミ思召被定候ベシ、サテモ最期ノ一念ニ依テ三界ニ生ヲ引クト經文ニ説レテ候ヘバ、萬世ノ後ノ御事萬般慮ニ懸リ候ハシ、事ヲバ悉仰置レ候テ、後生善所ノ望ヲノミ、心ニ懸ラレ候ベシト申サレタリケレバ、主上若シゲナル御息ヲ吐セ給ヒテ、妻子珍寶及王位臨命終時不隨者、是如来ノ金言ニシテ平生朕ガ心ニ有シ事ナレバ、泰穆公ガ三良ヲ埋メ、始皇帝ノ寶玉ヲ隨ヘシ事一モ朕ガ心ニ取

ズ、只生々世々ノ妄念共ナルベキハ朝敵ヲ悉亡シテ四海ヲ令泰平ト思計ナリ、朕則早世ノ後ハ第七ノ宮ニテハ宮ト為スベシハ宮ハ義ヲ天子ノ位ニ即奉テ忠臣事ヲ謀リ、義貞義助ガ忠功ヲ賞シテ子孫不義ノ行ナクバ股肱ノ臣トシテ天下ヲ鎮ムベシ、思之故ニ玉骨ハ縱南山ノ苔ニ埋モルトモ塊魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ、若命ヲ背キ義ヲ輕セバ君モ繼體ノ君ニ非ズ、臣モ忠烈ノ臣ニ非ジト、委細ニ綸言ヲ殘サレテ、左ノ御手ニ法華經ノ五ノ卷ヲ持セ給ヒ、右ノ御手ニハ御叙ヲ按シテ、八月十六日ノ丑ノ刻ニ遂ニ崩御成ニケリ

○太平記ノ趣ニテハ御位ノ事詳ナラザルニ似タレド然ラズ、第七ノ宮ノ天子ノ位ニ即奉テトアルニテ、其ノ時神器ヲ授ラレタルナリ、又君モ繼體ノ君ニ非ズトアルモ、後村上天皇ヲサレテ、此ノ書唯後醍醐天皇ノ御遺言ヲ旨ト

ノ記粗ニナレ、讓位ノ事

吉野拾遺 同ト八月 〇延元四年 弦月 免らるより秋

霧子おのりされうせ給ひけるが、このころ時をたゝりし先
し、年るふや、同十五日に東親王〇義良親王ヲイフを左大臣經
忠公の亭ふらりし、年らせ給ひ、三種の御みからを讓
り給へし、御紐と法華經とを左大臣經忠公より給ひ
りさよひの月空無ふ雲隠れさせ給ひけるふ、附從ひ
奉りし人々、この間、諸ふまらふころなりし給ひける

○後醍醐天皇御存存ノウチ皇位ヲ後村上天皇ニ讓シコト
上ニ引ケル神皇正統記及南方紀傳ト此ノ書トヲ合觀シテ
其ノ情実ヲ知ルベシ但シ南方紀傳ハ本書卷四皇太子
如クシテ皇位ヲ繼承セシ事ノ條ニ引ケリ見ルベシ

天皇衰老ヲ以テ皇位ヲ讓リシ事

天皇年衰老ニ至リ一日萬機ニ堪へず、因テ皇位
ヲ皇太子皇太弟及皇子皇女ニ讓ル、是ヲ讓位ト
イフ、法トル可カラザルニ似タリト雖ヘドモ、而

レドモ亦己ムコトヲ得ザルニ出ヅルナリ

元明天皇 光仁天皇 正親町天皇

○元明天皇 讓位時年五十五歲

元明天皇紀 靈龜元年九月庚辰天皇禪位于氷高内親王氷高内親王ハ即詔曰乾道統天文明於是馭曆大寶曰位震極所以居尊昔者揖讓之君旁求歷試干戈之主繼體承基昭歟後昆克隆禹跡狀君臨天下撫育黎元蒙上天之保休頼祖宗之遺慶海内晏靜區夏安寧然而兢兢之志夙夜不息翼翼之情日慎一日憂勞庶政九載于茲今精華漸衰耄期斯倦深求闕逸高蹈風雲釋累遺璽將同脫屣因此神器欲讓皇太子皇太子ハ首武天皇而年齒幼稚未離深宮庶務多端一日萬機一品氷高内親王早叶祥有夙彰德音天縱寬仁沉靜婉孌華夏載佇謳詠知歸今傳皇帝位於内親王、公卿百寮宜悉祇奉以稱朕意焉

出ツルナリ

○元正天皇

元正天皇紀 神龜元年二月甲午天皇禪位於皇太子○皇太子
武天皇十即聖
 聖武天皇紀 天皇國押開豐櫻皮天皇○聖武天皇天之真宗豐
 祖父天皇○文武天皇之皇子也云云二月甲午受禪即位於大極
 殿大赦天下詔曰○元正天皇云云此食國天下者掛畏藤原
 官天下所知美麻斯乃父止坐天皇乃○文武天皇美麻斯○
 武天皇賜志天下之業止詔大命乎聞食忍義受賜懼理坐事乎
 衆聞食宜可久賜時美麻斯親王乃齡乃弱爾荷重波不堪○
 所念坐而皇祖母坐志掛畏岐我皇天皇○元明天授奉岐
 依行而是平城大宮○現御神止坐而大八嶋國所知而靈龜元
 年○此乃天日嗣高御座之業食國天下之政乎朕○元正天皇

○高

授賜讓賜而教賜詔賜○都良掛畏淡海大津宮御宇倭根子天皇
 乃○天智天皇萬世○不改常典止立賜教賜○隨法後遂者我子
 爾○聖武天皇○我子○時○聖武天皇○皇太子○佐多○如○爾○年○俱○佐○加
 爾無過事授賜止負賜詔賜○比志○依○今○授○賜○所○念○坐○間○爾○去
 年九月天地既大瑞物顯來○又四方食國乃年實豐○爾○年○俱○佐
 加爾得在止見賜而隨神母所念行○爾○于○都○斯○母○皇○朕○賀○御○世○當
 顯見留物○者○不在○今○將○嗣○坐○御○世○名○乎○記○而○應○來○顯○來○留○物○爾
 在○良○志○所○念○坐○而○今○神○龜○二○字○御○世○乃○年○名○止○定○立○改○養○老○八○年
 為神龜元年而天日嗣高御座食國天下之業乎吾子美麻斯王
 爾授賜止詔云○聖武天皇時○
 天皇災異○以○皇位○讓○リ○シ○事○
 天皇災異累○臻○ル○以○自○謂○フ○缺○德○ノ○致○ス○所○
 十リト、因○テ○皇位○ヲ○皇太子皇太弟及皇子皇女○

皇德天皇紀 卷之八

讓ル是ヲ讓位トイフ法トル可カラザルニ似タ
リト雖ヘドモ、而レドモ往々此ノ迹ニ倣ヒ以テ
皇位ヲ避ク、故ニ次下ニ掲載シテ其ノ概略ヲ示
ス

- 清和天皇 宇多天皇 朱雀天皇 三條天皇
- 土御門天皇 後堀河天皇 龜山天皇 後花園天皇
- 後西院天皇 東山天皇

○清和天皇

清和天皇紀 貞觀十八年十一月廿七日車駕幸深殿院、廿八
日天皇有意讓位、故出居外宮云云廿九日皇太子○皇太子ハ
自出東宮駕牛車詣深殿院、是日天皇讓位於皇太子
天皇テ即陽成自出東宮駕牛車詣深殿院、是日天皇讓位於皇太子
云詔曰云朕以薄德 天日嗣乎 忝之賜 併日夜無間 久
慰 御座 頻而君臨漸久 久年月改隨 爾熱病頻發 判御體疲弱

之不地、曉朝政加以比年之間災異繁見、天下無寧之此乎、每
思、爾憂傷彌甚、是以此位乎脫履、天御病乎治賜、此國家乃災
害乎、領女息止先念行止須已年久泰利然也皇太子乃成人、予待賜
布為天子、今經數年、止今所思、波朕也、昔以幼穉、天得鐘、此位利
賢臣乃保佐、爾賴天得至於今日、利然則良佐乃翼戴、波皇太子
乃大成、已何遠之、有止念行、須故是以皇太子止定、留負明親王
爾○陽成天此位乎授賜、布諸衆此狀乎悟、天清直心乎持、天皇
太子乎輔導、岐仕奉天下乎平、今有典云、○天皇災異ヲ
一、事ハ、詔ニ比年ノ間災異繁見、云云トアルニテ、瞭然カリ、又
條ニモ載ス、宜シ
合觀スベシ

○宇多天皇

日本紀略 醍醐天皇云寬平九年七月三日卯二刻於清涼
殿加元服、年十三〇元服ヲ加フル者ハ、敦午三刻太上皇○宇

皇... 諫天祚于紫宸殿傳國詔命云春宮大夫藤原朝臣... 推大夫管原朝臣... 請之事可宜可行云云... 朱雀天皇

日本紀略 朱雀院云 天慶九年四月廿日天皇逃位於皇太弟成明親王... 兼少傅門督兼系忠文部卿... 藤原仲舒を副將軍とて差つりはさる、平貞盛及原秀卿等心を一つし、將門をあらはし、その首をさす...

けふ、忽り所讓位事終せられたる
皇位ヲ順徳天皇ノ
ヲイフ 承元四年十一月廿五日小受禪位事有り
〇土御門天皇ノ
天皇ノ災異ヲ以テ皇位ヲ皇太弟守成親王ニ譲ル増鏡ヲ按
ンル = 天皇災異ヲ以テ為ル者ハ、恐クハ辞ト為スノミナラ

○後堀河天皇

百練鈔 後堀河天皇云 貞永元年閏九月八日彗星見東方
長二丈餘云 十月二日於前關白里第被定讓位事依應徳例
也、權中納言定家注出寛平國史今度依可追彼例云云、四日有
讓位事依彗星之變為據也 〇後堀河天皇位ヲ四條天皇ニ
位ヲ讓ルトイハドモ一ツニハ御疾ニ因リ、天皇災異ニ因テ皇
= 因テ皇位ヲ讓シ事ノ條ニモ掲載ス、宜シク合觀スベシ
増鏡 〇貞永元年十月廿四日
云 十月云 因ト四日
ありたるさせ給ふ 〇後堀河天皇 所なやとありしはふりり
たりたり云 云う人の様をさせ給ひては七日や

尊號あり、所なやとありしはふりり
三年むりりの天変しきなり、なるありあがりてさやと志げく
所情とありしやうなれば、いふありしはふりり
わくを

○龜山天皇

増鏡 〇貞永十一年十月十六日
母法中さわがしきやうなれば、いふありしはふりり
より圓満院法二品親王内ふさあひ給ひて、彗星五法
法依法つとえしきやうなれば、いふありしはふりり
より、所なやとありしはふりり、上下立澄ぎ給ひるさま
思ひやふらへ、大宮院も内ふおけしはふりり、なる頃ふ急
出させ給ふ、馬車法標木ふもをてふ火燃え付けふを、又
うりよせしき言 〇世仁親王ニテ即 奉皇たり、そ給ひ

日句當法内侍里へいそふりり色ば、ぬまのめ結鍵をさへも望
 先失ひていみどき大事なりけるを、うへ〇うへハ龜山天皇ヲイフ聞
 りてあともかふらませ結ひしをせければ、さげりつるさ戸結
 まるびりてあさたりけるぞおそあしき、さなくばいそをゆい
 きことをあふさるりけふ、故院〇後醍醐天結法處分結
 入るる法小庵榎かふられ結法寶事故あく取出されぬ、そ結
 ふもあふりさめきて法のりん序うぶぎぬなと結入るる物の
 跡ふたり、上寺櫻興あし押小路殿へ移りたりぬ、法親王ハ
 修法結つよきゆゑふかふる事をあふりそぞ結さよを結さ
 ら結四月ふ結さしゆいゆりつあふ、いしく結どなるかるハげふ
 いととさわさあまきど、むりも三條院位結所時うらと大内
 造りうてられてあふいゆい結夜らそ、やがて火を來て
 燒ふしあともとれぬ、是より重き大事もあふべしそらあふ

かよりうらんそゆつはせん、こうてあまもくられぬ、上寺
 いふくそ結中心あふらるりあふされて、あまあんの
 所心づひをあり、信ふあけりそと十五年げりあや
 ありぬらん、いそと三十あもさるかふらぬあ結法よそ
 ひなれぬ、今そさつりあ若うさうらなふ結不どなる
 同書ま文永十一年正月廿六日春宮ふ位讓里まを
 結〇龜山天皇ノ皇位ヲ後廿五日結表まづ月信下御直門
 具して押小路殿へ行幸ありて、又結日とらさるりふ二條内裏
 へ渡されり〇龜山天皇災異ヲ以テ皇位ヲ讓シト、上ニ
引トコロノ増鏡ノおをら川草枕ノ兩卷ノ文
ニテ知ルベシ、又一ツニハ天皇萬機ニ堪ヘズシテ皇位ヲ
讓シトコトノ徵アリ、故ニ兩條ニ掲載ス宜シク合觀スベシ
 ○後花園天皇
 池田葉屑卷九 寛正も五年ふそ那王侍る、近きそふそ結
 承とていあへ結さるひよあそ結あや結あひのさるり

得ノ條ニ

○東山天皇

摠記後集卷五 東山院御讓位アリテ程ナク崩御ナリタル
 故ニコト當今上皇帝○中御門天ハ天皇元服ニテマシマス
 由ナリ、イカニシテカハ御歳モタラヌ親王ニ御讓位アリタ
 ルニヤト伺、仰ニ往古ヨリ御讓位ノコトソノ例多シ、安德
 天皇ハ二歳ニテ御讓位アリシ上ハソノ余甚多シイカナル
 思召ヤラン殊外ニ御讓位ヲ急ガレテ、炎上ノ後近衛ノ仮殿
 ニテノ御讓位ナリ、ソノ中ニ禁裏院中造營事了テ當今ハ直
 ニ御遷幸ヲ禁裏ヘナサル、東山院ニハ新院ヘ御入ナサレ
 テ新院ト稱シ奉リタルナリ崩御ナリタル故ニ天皇○中御
 元服ニテアリタルニ非ズ、御存生一テモ既ニ御讓位ノ
 リタル上ハ先帝○東山天スデニ新院ニテマシマセバ、天皇

タルコト明ナリ○此ノ文中ニイカナル思召ヤラン殊ノ外
 災異ニ因テ皇位ヲ讓シコト知ラル、東山天皇讓位ノ歲崩ガ
 シヲ以テ、或ハ疾ニ因ルニヤトモイフバケレド然ラズ、故ニ
 次下ニ皇統御譜及
 野史ヲ引テ辨ス

皇統御譜 東山天皇云 寶永五年三月八日内裏炎上行幸

于加茂社同日遷幸于近衛殿関白家熙公御同日劔重渡御近

衛殿同六年六月自十二日一七日新造御所御安鎮同月廿一

日御讓位於近衛殿劔重渡御新帝御在所同年十二月十七日

崩御三十五歳同月廿二日御入棺同日奉稱東山院○東山天

野史卷十四 東山天皇云 帝即位之後災變屢至人心洶洶

帝自海非德遂遜位

天皇萬機ニ堪ヘスレテ皇位ヲ讓リシ事

天皇萬機ニ倦ム、因テ皇位ヲ皇太子皇太弟及皇

子皇女ニ讓ル是ヲ讓位トイフ天皇身疾アリテ
 皇位ヲ讓ルモ亦萬機ニ堪ヘザルナリ然レドモ
 古書ニ萬機ニ堪ヘザルノ證無キ者ハ天皇疾ニ
 因テ皇位ヲ讓シ事ノ條ニ収メテ此ノ條ニ掲ケ
 る又白河天皇萬機ニ倦ムヲ辭トシ以テ皇位ヲ
 避ケ仙宮ニ徙御シテ仍專ラ大事ヲ判決ス以來歷
 世天皇多ク之ニ倣フ亦以テ此ノ條ニ掲ケ此ノ
 條ニ並ニ法トルベカラズト雖ヘドモ而レドモ
 由テ來ルコト久シ歎ズベキカナ

聖武天皇 孝謙天皇 圓融天皇 白河天皇
 鳥羽天皇 後白河天皇 高倉天皇 後鳥羽天皇
 後嵯峨天皇 龜山天皇 伏見天皇 後龜山天皇
 光明天皇 後光嚴天皇 後圓融天皇 後小松天皇

後花園天皇 後陽成天皇 後水尾天皇 明正天皇
 靈元天皇 中御門天皇 櫻町天皇 後櫻町天皇
 光格天皇

○聖武天皇

聖武天皇紀 天平勝寶元年○天平廿一年ヲ改メテ天平勝寶元年ト為ス又改メテ天平勝寶元年ト為ス五月丙辰天皇遷御藥師寺宮為御在所云秋七月甲子皇太子○阿倍内親王ニテ受禪即位於大極殿詔曰現神止御宇倭根子天皇可御命止良麻宜○聖武天皇御命乎衆聞食宣云食國天下乎惠賜比治賜布間○萬機密久多志御身不敢賜有禮隨法天日嗣高御座乃業者朕子王爾皇ヲイフ授賜止勅天皇御命乎親王等玉臣等百官人等天下乃公民衆聞食宜云賜○萬機密トアルトコト注意ス

○孝謙天皇

皇位繼承考 卷之八

淳仁天皇紀 天平實字二年八月庚子朔高野天皇 皇〇孝謙天

禪位於皇太子 〇大炊王ニテ即詔曰現神御宇天皇 皇〇孝謙天

詔旨 止良麻宜勅乎親王諸王官人等衆聞食宜云云 然皇止坐

天下政事 聞看事者勞岐重并事 在利年長久日多 此座坐

波荷重力弱 不堪負荷加以掛畏朕婆婆皇太后 〇婆婆皇太

是以此位 避間乃人 在之如理婆婆 波朕情母日夜不安

皇太子受禪即天皇位於大極殿 授賜止宜天皇御命衆聞食宜是日

〇圓融天皇

榮花物語

此〇表事ナドニ さまれいみト

〇圓融天皇ノ勉メ 〇表事ナドニ さまれいみト

〇圓融天皇ノ勉メ 〇表事ナドニ さまれいみト

永觀元年 〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

〇正月 〇二月 〇三月 〇四月 〇五月 〇六月 〇七月 〇八月 〇九月 〇十月 〇十一月 〇十二月

法性寺關白志通公記 保安四年正月廿八日壬午自去夜候

丙子時皇居土御門鳥九第也件所願被似依昨日仰被渡鈴

印等於新帝〇崇德天皇御在所之間事書出卷清源鈔等也以兵

庫頭盛幸御覽院此日天皇〇鳥羽天皇有讓位第一親王事〇第

王〇崇德天皇親王〇藤原云辰始太政大臣參左仗座云此間仰

宣命趣其詞云以顯仁親王可為皇太子今依薄德即讓皇位以

關白藤原朝臣〇忠通攝行政事一如忠仁公故事云〇詔書

德〇藤原以〇皇位讓〇外言〇知ス〇ベシ〇萬機〇一鴻〇ハス〇

院中〇世於〇テ次〇スル〇意小〇事ハ〇兼德〇天皇〇二仕〇セラ〇レハ〇大事〇ハ自〇ラ

後白河天皇

續世繼物語〇保元三年八月十六日誤〇十六日十一日

日位東宮小讓王申させ給ふ〇後白河天皇讓〇ル十一日守

仁親王ハ即ニ 位ふおけしきんこと三年ありきおまの孫

條天皇ナリ 〇鳥羽天皇ノ例ニ依テ院中一

ある處 於テ大事ヲ判決セシトナリ

愚管鈔卷五 保元三年八月十一日おまの孫

羽宮定小女をまの孫云 〇上ニ引ク處ノ續世繼物語

シベ

高倉天皇

吉記 治承四年二月廿一日自朝雨降云 今日可有御讓位

事云 次子亦著膝突仰宣命之趣其詞云依薄德讓王位於皇

太子〇皇太子ハ言〇仁親王以〇關白内〇大臣藤原朝臣攝行政事

一如忠仁公故事云〇高倉天皇萬機ニ堪ハシテ皇位ヲ

家物語卷四ニ云ク治承四年云ニ月廿一日主上と云る

せんそり、是カ入るお小トろづ思ふさまあるがいとそと
ころをアハルハ、平氏ノ專横ヲ思ヒテ記セルニテ清盛ノ
強ク天皇ヲ遷位セシメハ非ルナリ源平盛衰記卷十二
ニ記セル所モ亦同シ趣ナリ是モ亦清盛ノ專横ヲ思ハルナリ

〇後鳥羽天皇

増鏡おさむら 所門ちどり後より八十二代おありては
鳥羽院と申御所一御所ニ云建久九年正月第一日
所子門院土御四小なを孫ふ小孫任也中より後孫ひ了松皇
る孫ふ、信ふお月一を事十五年なりふ、くお所をそ、ち
ぼりのの所、齡あ、いと後、く、うあ、盛さ、所、幸、な、れ、せ、も、
よ、う、ら、は、は、ま、は、有、極、よ、う、い、中、く、や、そ、ら、ら、く、お、所、幸、か、り、ど
あ、は、は、ま、ま、な、た、び、と、く、中、〇天皇萬機ニ堪ハザル状
ろ、い、め、は、事、を、今、も、こ、う、も、く、子、の、り、と、め、か、り、
〇謙位ノ
後モ院中
聽ニ召スヲイフ

玉海 建久九年正月七日讓位事傳國等事、自元不及沙汰云

云、幼主〇為仁親王ニテ即不甘心之由東方〇東方ハ鎌倉ノ

ハ、頼朝大將軍頻雖令中、綸旨懇切公朝法師下向之時被仰子

細之時、慙承諾中〇天皇萬機ニ堪ヘザルマシ然而皇子之中、未、被、定

其人、關東許可之後、敢取孔子賦、又被行御占、皆以能圓孫為吉

兆云云、仍被一定了、此旨以飛脚被仰關東了、不待彼歸來十一

日可有傳國之事云云、十一日此日讓位也

愚管鈔卷六 かのふほどふ同九年正月廿一日〇建久九

云云 皇子〇為仁親王ヲイフ此四小、宋らせ孫ふを踐祚〇此院

皇ヲイフ 〇後鳥羽天皇も今、事、マ、ク、一、意、ふ、任、せ、か、が、や、と、思、召、あ、り、

か、い、ひ、ひ、く、り、関東に於て、おの、う、ち、か、た、る、ゆ、あ、さ、

ね、も、な、り、け、ふ、あ、や、頼朝も、ふ、孫、を、こ、る、ら、と、か、ふ、と

や、思、ひ、らん、是、を、か、く、志、ま、り、ふ、人、も、那、さ、さ、の、ひ、お、こ、ら、り、

